

空同おかしむら

第四集

座間むかしむかし

第四集刊行に当って

都市化が進み、人口集中の著しい本市にも、現在尙多くの史蹟や伝承が孫され、今尙息づいております。

さて、一昨年「座間むかしむかし第三集」を刊行しましたところ、予想外に市民の関心が高く、是非続刊をと云う声に答えるために本集を上梓しました。

本集は、近代・現代と身近かな、しかも興味あるものを集めたわけですが、これらのものも既に過去のものとなり、貴重なものと考えられます。

この小冊子が、多くの方々に活用され、郷土の文化財の保護に役立てば、幸いこれに過ぎるものではありません。

終りに本誌刊行にあたり、御執筆の労をいただきました各氏に深く感謝の意を表すものでございます。

昭和五十一年十月

座間市教育委員会

第四集発行に当って

座間市教育委員会

目次

表紙題字 平野諒栄

関東大地震思い出の記……………野口 麻吉…………… 2	祭 囃 子……………飯島 忠雄…………… 10	地 芝 居……………飯島 忠雄…………… 14	鈴鹿明神棟札……………飯島 忠雄…………… 22	失われた村……………鈴木 芳夫…………… 25	明治時代の栗原……………大矢助次郎…………… 35
-----------------------------	-------------------------	-------------------------	--------------------------	-------------------------	---------------------------

(遺稿)

陸軍士官学校移転とその周辺……………小俣 国栄…………… 44	畑灌桜の由来……………角田 俊久…………… 54	六法言葉……………飯島 忠雄…………… 57	生駒芸談……………飯島 忠雄…………… 59	カラスの勘ンちゃん……………白井 光信…………… 68
---------------------------------	--------------------------	------------------------	------------------------	-----------------------------

関東大地震の思い出 (I)

野口麻吉

〔はじめに………編者〕

この原稿は野口麻吉氏が、今から五十余年前の関東大地震の時の経験を、その後間もない大正十二年十月頃に半紙に毛筆で刻明に記録されたものですが(写真参照)、何分当時は人心も定まっていず、備忘録的に記してあって、辞句的に未熟で判りにくい点も多少なくはなかつたのですが、このほど本誌に発表するにあたり、なるべく当時の姿を崩さないようにして判り易いように、書き改められたものです。

統計的にいって、今後数十年の間には、ほとんど確定的に大地震に見舞われると予想されている当地方に住む者にとつて、数々の貴重な教訓が含まれているものと

も強く、大嵐となつてしまつたが、養蚕があるので桑取りに行かねばならない。何時もなら牛車で行くのだが、あまり大降りだから、牛は連れずに行つた。篠つく様を雨であつたが、忽ち止んで、晴天となつた。南風が普通より強かつた。

正午頃桑を取つて帰途についた。芝原七畝割りを出掛けて三、四丁来ると、急によろけて、天秤でかついで居た桑を、ほりり出しているところがつてしまつた。いっしょに母も目差籠を背負つたまま、尻餅をついてしまつた。なお立つことが出来ない。大地はむくむくとしている。其の時は何んであるかわからなかつた。其の前、大きな地鳴りがしたと後に聞いたが、我々は道を歩いていて気がつかなかつた。

ようやく大地震であると悟つた。道芝にかまつて居つたが、身体は大地からほりり出されるようで、どうすることも出来ない。昔から大地震の時には地に割れ間が出来て、落ちると死んでしまふという事を、まるで他所

思われます。

なお、公式の記録では、関東大地震の発生した時刻は、午前十一時五十八分となつていますが、本稿の標示部分は、記録当時のままにしました。

次回は、大地震に引き続いて起つた、いわゆる「朝鮮人さわぎ」です。本来まゝとめて発表すべきなのですが、本誌の性格上、止むを得ず分割いたしました。筆者と読者のご了承をお願いする次第であります。

大正拾貳年九月一日午後零時四十分大地震

八月三十一日 晴天 夕方西方大山丹沢山などの上に、おそろしい様な棚雲が出た。今迄久しく雨が降らず、芝原など非常に乾いてしまつた。これでは近い内にお湿りがあるだろう、などと云いながら、桑取りから帰つた。夜は初め星など出ていたが、後雨が降りだした。

九月一日 朝方より大雨となつた。南の風



「関東大地震の思い出」原本

の話のように聞いていたが、今は目のあたり
地が割れてしまいかと思われるので、少しで
も大きな物につかまっっている方がよいと思っ
て、そばの畑の桑の木に、這いながら行つて
つかまっ、母にも「桑の木に来てつかまり
な」と云ったが、「歩けない」と云っておら
れた。

少し静まったので、桑をかついで出掛けた。
こんな地震は初めてだが、多分家が潰れた
所もある、もしかしたら箱根山あたりが噴
火でもしたのかもしれない、自分の家など潰
れてしまったかどうか、潰れてしまつても仕
方がないが、皆うまく逃げ出して呉れれ
ばよいが、心配しながら急いで歩いたが、三
四丁来ると又も揺れて来て、かつぎ籠を投げ
出して尻餅をついてしまつた。

年寄り、安政の大地震の時には空飛ぶ鳥
も飛べなかつた、と人寄せの時などに話して
居られたのを、そんなものと聞いて居つた
が、今、目のあたり、驚いて飛び出した鳥が
送電線の鉄塔の回りをガアガア鳴いて飛んで

いるのを見て、如何に大地がゆれても、鳥が
飛べないという事はないと思つた。

又出掛けて小池窪へ来ると、道が半分欠け
落ちてゐる。坂は両側の土が崩れ落ちて、道
が狭くなる程である。町田街道まで来ると、
又もひどい揺れが来た。道しるべの木を持っ
て来て、腰を掛けていた。

大坂へくると、又両側の土が崩れて、木も
いっしょに滑り出して倒れ、両方の木が交叉
してゐる。それを跨ぎながら、やっと坂を下
つた。今朝大雨で牛を連れて来なくて助かつ
た。牛や車があつたら、大坂を通ることは出
来なかつたのだ。丁度大坂で地震にあつた者
が、びっくりして逃げたのである、道には
畑から取つて来た茄子などが、あちらこちら
に落ちていた。

谷戸田へ来ると、道は亀裂が甚だしく、飛
び飛び歩くように、田の側にある畑などは、
田へ其のまま押し出して、狭い畑が広い畑に
なつてしまつてゐる。谷戸田橋は半分壊れて
しまつていた。

平和坂まで来ると、中宿の瀬戸喜之助さん
と村山関太郎さんが居られた。我々を見て、
随分ひどい地震だつたが、河原宿は特にひど
くて、家が多数潰れたそうである、と云はれ
た。よく原（畑）から帰りに、平和坂で河原
宿の方を見ると、自分の家の屋根が見えたの
に、其の時は自分の家が見えないので、まっ
きり潰れてしまつたと思つた。後で考えてみ
ると、昔は表の木が短かくて屋根が見えたの
だが、此の頃は木が長くなつて見えなくなつ
ていた訳けだが、其の時はそんな事は考えず、
ずいぶん心配した。途中で人に、我が家がつ
ぶれたか、と聞いたら、「なに、潰れはしな
い」と云われたが、何んだか本当には思えな
かつた。

森川庫之助さんの所まで来ると、皆、我々
を見て、お前の家の者は兵さん（小湊徳次郎）
の竹藪に居る、と云うので、桑を其処へ置い
て見に行つた。近所の者も皆居る。家の者も
居つたので、皆怪我もなく、家も潰れなかつ
たことがわかつて、やつと安心した。

家へ来て見ると、乱暴になつてしまつてい
る。家内の話を聞くと、蚕に給桑し、オカッ
（三女、一才）を寝かして、昼食の湯を沸そ
うと思ひ、薪を持つと地震が始まつたので、
早々座敷へ上つてオカッをかかえ出したが、
まだオヌイ（長女、六才）とオノブ（二女、
四才）が居るので、「早く出る出る」と呼ん
でも、子供の事ゆえ、早い事は出来ない。地
震はひどくなる。やつと子供はころがりなが
ら出た。オヌイは裏へ出たのを呼んで、表の
もちの木につかまつてゐると、又ひどくなつ
て、戸、障子がはたばたと外れる。家は今に
も潰れるばかり、道でも庭でも地が割れて、
赤泥水が噴き出して、今にも泥海になるかと
思う様であつたという。それから兵さんの竹
藪へ逃げたのであるという。牛は隣の熊治

（野口）さんが出して呉れたとの事である。
日頃なら一匹でも大切に作る蚕を、家に入
つてみると、エビラが棚から落ちて、蚕が盛
り上つてゐる。拾い上げて、母と桑を呉れた
が、それと云つたら逃げ出す事として給桑

して、五、六十枚に呉れたが、その間に三、四回逃げ出した。

それから夜の準備を皆でした。丸太を運んで、兵さんの竹藪の北側の新田道へ並べ、その上にマブシ藁を敷き、上には桐油紙を掛け、女子供は夜其処に寝かす事にした。

何処でも井戸が崩れてしまったので飲料水に困り、新田宿の者まで小湊林造さんの井戸へ水を貰いに来た。何処の井戸も当時六尺

(一・八メートル)も掘れば水が出て、回りは石で積み上げて作ってあったものだから、皆崩れて埋まったのだが、林造さんの井戸は石のかわりにコンクリートの管で出来ていたので、崩れなかつたのである。

夕方早く夕飯をこしらえて食し、夜の用意をした。家もこわれたり戸も締らないから、不用心なので、表の道へ丸太を組んで、母と其処で夜を明すことにした。絶え間なく地震は来るのである。

夜になつても厚木は火災で天に映り、ガソリンポンプの音も聞えて物凄い。東京・横浜

南は皆潰れて、潰れない家はどうかしている位だそうである。下今泉の油屋では、潰れると同時に火事になつて、二人中にて焼け死んでしまった。厚木は地震と同時に火事となり、全部焼き払い、焼死者がたくさん有つた。厚木の相模橋は落ちてしまつて、往来不通となる。幸い橋上には一人もいなかったそうである。

汽車、電車、電信、電話皆不通。電灯もつかず。

横須賀水道の相模川鉄橋は落ちなかつたが、鉄管が折れてしまつた。

馬入の東海道線鉄橋、東海道の馬入橋、全部破壊。平塚の日本火薬製造所皆爆発。

熱海線の列車が根府川鉄橋へ差し掛つた際、第一震で鉄橋が落ちて、列車・乗客諸共海へ突込んで全滅してしまつたそうである。

厚木全潰全焼。秦野全焼。小田原全焼。平塚、藤沢、鎌倉、全滅。横須賀全焼。横浜全焼、死者七万。正金銀行内にても三百名も焼死する。裁判所では裁判中で、裁判

・横須賀方面の空には、古老もまだ見た事もないと云うむくむくとした怪雲がおつ立て、それに火災の光が映り、何とも云えない物凄さである。翌日になつても其の雲はそのまま動かなくなつた。果して何の雲であつたか。只、地震の時にはああいふ雲が出るものか、又は大火のため地が非常に熱せられて、其のため水蒸気が登つて出来たものか、誰にもわからなかつた。

河原宿では木俣政治さんの家が潰れた。政治家さんの長女のトヨちゃんを、暑中休暇中、家ではオカンの子守りに頼んで居つて、前日まで子守をしてくれ、自分の家へ連れて行つたため、おしまいにしたので、連れて行つていなくてよかつたと思つた。連れて行つて家が潰れたのではどうにもならない。

何処の家も半壊くらいのものである。新田宿。四ツ谷は半分くらい潰れてしまつたそうである。中河原は、潰れない家でも、床下まで地中に埋まつた所が沢山ある。下今泉から

長、判事、検事を始め、傍聴人まで全部圧死した。

保土ヶ谷の紡績工場では、工女が三千人も焼死したという。何んでも工女を囲の外へ出さなかつたのだという。煙突は倒れ、工場は火災を起し、工女は皆焼死してしまつたとのことだ。

横浜。家は皆潰れ、橋は皆落ち、火災は起り、逃げるに道はなく、圧死。焼死した者数知れず、逃げる者は潰れた家の屋根伝いに当てもなく走つたということだ。石油タンクが爆発して、石油が川に流れ出し、川一面に火が流れたため、水上の舟は皆焼けて、底のみ残り、川に飛び込んだ者も、却つて川の中で焼死する、という仕末であり、あたり一面死者山の如し、であつたという。

東京は地震と共に八十八ヶ所も出火し、八方火事となつた。全市の六割四分焼失。焼死者二十万、負傷者数知れず、本所被服廠跡へ避難した者三万六千人、全部窒息焼

死して、死者山の如し。東京電気会社四百名死する。

隅田川の中には死者がすき間もなく浮いておつた、中には子供を一人背負い、二人抱えて死んでいる女や、子供を産んで、まだ子供が親とつながつたまま二人とも死んでいるのもあつたという。電車の中で焼死し、よく焼けて骨もろくに残らない者や、ただ炙れて死んだ者もあつて、実に此の世なる焦熱地獄である。

市民は多く宮城前へ避難した。宮城内へも避難させたとのことである。

此の日、山本権兵衛伯内閣総理大臣となつて、親任式のある日であつた。故に山本内閣を地震内閣といつてゐる。

厚木は自動車のタンクから発火して全焼し、死者多数あり、女学校も全焼した。

平塚、藤沢は火災はないが全部倒壊、遊行様もつぶれる。

鎌倉全滅、八幡宮ベシヤンコとなる。大鳥居倒壊、長谷大仏は三尺も前へいざり出

したという。円覚寺、建長寺も潰れて焼けってしまった。

横須賀海軍工廠倒壊、浦賀全焼、造船所全滅。小田原城倒潰、秦野専売局全焼。

八王子市は割合損害が少なかった。

震源地 伊豆大島の西北海中、東西五海里（約九キロメートル）、南北十八海里

（約三三キロメートル）にわたつて、五十尋（九〇メートル）から二百尋（三六〇メートル）ぐらい、海底が陥没したということである。

厚木の相模川で鮎を釣つていた人の話によると、何んでも大きな地鳴りがしたが、何事かと思ふ間もなく、川の水がおつ立つ様になつてきて、逃げるにも這つてやつと逃げた、ということである。又他の鮎を釣つていた人の話では、急に水がふえてきて、それまで浅い処に居たのが、深くなつてしまつて困つた、とのことである。

又藤沢の大庭坂を自転車で下つて来た人が、道が西側の田の中へ崩れ落ちたため、

いっしょに割れ口へ落ちてしまつて、助けを呼んでいたが、誰も助ける者がなく、遂に死んでしまつた、という話もある。

我が家の井戸は地震の一ヶ月以上も前から、うす白く濁つておつたが、何の為かわからなかつた。地震の日或る人が平塚の方に行くのに、田村あたりへ行つたら、子供が川で鰻をつかまえていたので、聞いたら、「日頃鰻はなかなかつかまらないのに、今日はよく捕れる」と云つていたとの事。それが地震の少し前の事だつたそうだ。後日思つた事だが、井戸水の濁りや、鰻が水中に居られず水面に浮び出たというのは、何か地震の前から少しづつ、地中からガスが噴き出しておつたのではないかと考えられる。

九月二日、曇天、朝濃霧

此の日は午前、アラクの畑に母と桑取りに行つたが、土手など皆崩れてしまつている。鷹番塚の所は北側の山が崩れて道が通れないので、山を通つた。アラクで桑を取つていても、地震がたびたび来るので、気味が悪かつ

た。桑は朝霧がひどかつたので、雫がたくるようである。一担ぎ取つて帰つて来て、昼頃給桑した。

午後になると、誰云うとなく、大津波が来ると云うので、皆集まつて、どうしたらよからう、と相談をした。實際来るものとしたら逃げなければならぬが、津波が来るとしたら昨日のうちに来るはずである。然し、ないとも云い切れない。年寄りなどは、此処まで津波が来てたまるものか、などと云う者があつたが、三陸の大津波など、十里(約四〇キロメートル)も来たと云うのだから、そんなに安心も出来ない。我が家では、子供と年寄りは星の谷の親類へ逃した。

それから家内と、蚕の網を上げて、一枚を一枚半くらいにして、マブンを掛けてしまおうというので、びくびくしながらやって居つた。

蚕ももう一日ぐらい桑を呉れなければいけないのだが、地震のため充分給桑も出来なかつたし、上簇はいつも二階へするのだ

が、危くて二階が使へず、何時も一枚の蚕は三、四枚くらいに薄く上簇するのだが、そんな事も出来ず、構はず厚く上簇したのだ。上簇した蚕も桑不足だから、幾日も繭を作らなかつたが、しまいには盛り上るほど厚く繭を作った。何時もなら繭が出来る、買手が沢山来たのだが、製糸場などつぶれたり、輸送なども出来ない、買手など一人も来ない。仕方なく乾燥しようとしても、乾燥場も鈴鹿に一ヶ所しかなく、皆此処へ持つて行くので、なかなか出来ない。やつの事で出来たが、やはり買手はなく、翌春になって、やっと厚木の心易い商人に買ってもらった。

さて、まだ上簇も終えないうちに、弥太さん（森川弥太郎、庫之助父）のオリキさんが、「大変だ、朝鮮人が六百人も押し来て、人を殺したり何かを盗んだりするよ」と、顔色を変えて鈴木先生の処へ行かれるので、困った事が出来た、と思つた。（以下次号）

祭 囃 子

飯 島 忠 雄

座間市内で祭囃子をはじめたのは、日露戦争のあとの明治三十年頃からである。鈴鹿明神の氏子の囃子は明治三十年十月に大鼓を新調した記録があるから、大門や皆原の大鼓も同じ時季に購入されたものである。囃子の導入先は各々違った所から導入したものであるが、八、九十年もたつと、何所から習得したかは詳かでない。入谷のはやしは、古老の話に依ると、東京府西多摩郡稲城村の祭囃子を導入したという。栗原神社では各区に一台づつ五台もはやしがあつて最近美事に復活して賑やかに騒々しく祭の景物として協演している。その中に下栗原のはやしだけが当市の無形文化財に指定されている。栗原の外新田宿の諏訪明神に一台あるが新田のはやしは大正初年に導入したのださうだ。新田のはやし

は当市のはやしの中で一番きれいな揆数の少ないはやしである。戸塚在の阿久和村が導入先と言われている。囃子の曲には古調なものとか手かずの多い新囃子とに分けられる。新ばやしは調子が早く騒々しく、古調のはやしは平単で変化に乏しいが笛の音調に妙味があつて一種の渋さがあつて、氏神もこの囃子を聞き召されて氏子の守護に懸命されるさうとさえ思われる程祭にふさわしいはやしもある。はやしの打ち方には屋台、鎌倉、四丁目、四王天、神田毬、岡崎、子守、等がある。何処のはやしでもこの曲名は同じで打ち方は各々違つて居る、特に違うのは屋台だけで、他の曲は打ち方が違うが、どこかに共通した所が必ずあり、笛の調子もどこの囃子にも合致しそうな所が見出せるのである。岡崎と子守は小大鼓の打ち方は全々同じで、大胴の入れ具合と、大胴と小大鼓のからみ方に単調なものと面白くからませる打ち方の差があるだけで、笛も大差はなささうだ。江戸時代には、各社独特のはやしがあつて、八幡宮では鎌倉をは

やし、四王天さんでは四王天のはやしをばやした。これは神に捧げる宝賽のはやしで氏子の者が神を鎮める祭行事の神事であつた。神事が終ると岡崎や子守をはやして余興としたものであつたが、永年の内に俗化して各社のはやしを取り交ぜてはやすようになったのである。明治頃になって、はやしの順序が決められた。はじめに屋台、二番目に鎌倉、三番目に四王天、四番目に四丁目、又は神田毬この後は岡崎や子守をはやした。笛の移りも是にしたがつてはやしの移り変わる前に序曲を鳴らして次は何の曲かを予知せしめる合図をして一糸乱れぬはやしを構成した。はやしというのは踊りの伴奏がはやしである。現代の踊りにも必ず伴奏がある。古代の踊りにも手拍子や木片を叩いて伴奏とした天の岩戸の神事神楽がある。現今の祭囃子に踊りが無いのは不思議であるが、古い時代に屋台や鎌倉、四王天の曲に踊りが付いて居るか否かは不明であるが、踊りと囃子が組合わされた曲目に岡崎がある。江戸巷話の中に、元祿の頃旗本の若

侍が吉原のたいこ持（幫間）に馬鹿踊りを習ったが馬鹿踊りを素面で踊ると奉行に叱られる上に親たちまで不行蹟のとがめを受けるので、考え抜いた揚句神楽面のひよつとことおかめの面を被って踊れば、おとがめから逃れる。馬鹿踊りに打って付けの面なので更に興味を増す処からひよつとこ面を被って馬鹿踊りを初めたところ、江戸の市民から受けて祭囃子の中に取り入れたということが出て居て、岡崎のはやしの名称は馬鹿踊りの開祖の岡崎という侍の苗字から名付けたという。こんなことが囃子に関する資料である。祭囃子も明治、大正、昭和と引きつがれて来たが大東亜戦のために食糧事情や何かで祭礼も簡畧になるにつれて、物資不足が拍車を掛けて余興なしの儀式だけの祭行事が続いて祭囃子も休止状態となり、敗戦の惨めさから祭礼などに身を入れることもアメリカの圧力下であった日本では旧来の祭礼を楽しむことすらも忘れたように神への奉仕は精神的にも薄らいで日本人という自覚さえ失いかけたが、ようやくア

方は伝えられて居ても神田毬の笛の吹手がなくなつたので、皆原の神田毬も絶滅の運命にあると言える。私は入谷のはやしを教えて五年目になる。はやしの志望者ははじめる時には二十二人あった。現在の私の心の中に、全曲目が一糸乱れぬ立派なはやし連を仕立てるには十年間を目指している。五曲の大胴小大鼓の一、二、も誰とも組んでも自在に打てる様に熟達するにはそれくらいの年季が必要である。一年間に五〇回の指導で一回二時間そこで祭前の六月中旬から八月一杯までが練習期間で、雨の夜間は大鼓を打たせないの雨の夜は公民館で口頭ではやしの問い合わせと強弱の細かい点を教えるが、それも一年に一、二回で、三十才前後の若者にくどく言う嫌気がさすのが恐いので年一、二回に止めるのである。囃子を教えるに交調したものは覚え込んだ者を正調に戻すために教えるのは苦労させられるのである。座間で二組の子供はやしが昨年誕生したが、指導の者は余程気を付けないと交調する恐れがある。はやしの

メリカから開放されて、独立して初めて日本人の意識を取り戻して祭行事も旧例にならって行方ようになったのはつい十年そこそこである。

祭行事の復古と同時に囃子もボツボツ復興しはじめて昭和五十年には、全部はやしが賑やかに神社の杜にこだまする様になった。処が、各地のはやしの曲目の中にいくつかの曲が復興から消え去った。その原因は笛吹が死亡したこととはやし方を覚えていた者が無たことや小大鼓は出来ても大胴の打ち手が無いので或る曲目は復興再現が不可能となった事実である。いま一つは、永い伝統のはやしの中に次第に崩れと交調が見出されたことである。はやしが始められてから八、九十年間に指導者の中に打ち方を違えて教えたものへ更に揆数が増えたり減ったりして交調したもののなどのために可成りのズレがある。是は注意して見ると、笛と合って居ないことから直感出来るのである。入谷のはやしの曲目の中から神田毬が消えた。皆原では神田毬の打ち

踊りで言い残した事柄を付け加えると、岡崎も子守も道化踊りであるが、子守をはじめる前におかめさんが鈴と幣束を持って踊るのである。これは囃子の屋台を浄める所作と神を鎮めるはやしを奉納する一種の儀式という意味を含んだ踊りである。子守の踊りには獅子頭を子供に見立てて抱いて踊るのであって、獅子頭は屋台ばやしにも使用する。屋台の獅子は獅子がされる型を踊るのであって定形はない様だ。囃子の器物は笛、大胴、小大鼓二個、摺鉦一ヶ拍子木で兵男面一面、おかめの面一面で別に獅子頭がある。市内で全部道具が揃っているのはやし連は下栗原の若音連だけであって、入谷の三台のはやしには笛と大鼓だけである。新田の囃子には、両面踊りがある。おかめと兵男二面を前うしろに被り上衣も裏表を返して前後がわからぬ様にして踊るのである。手の平は裏返しが出来ないが、上手に踊ると表裏の見分けが付かない程巧妙に踊るのである。この妙技は神楽師の故本多弥助翁が新田宿に残した珍芸であるから永く残

したいものである。はやしの練習は最初竹竿を横にして口うつしてトロックテンと一と接ぶつ何十回もくり返して教えるのである。一曲大ざっぱに覚えるのに二年はかかる。五年、七年の歳月をかけた練習を積み重ねた上で下手乍らも一応はやし連がまとまるのだ。笛もそうで夜間と雨天には指の動きの練習である。はやしは四人一組でなければ練習出来ないが笛は師弟一対一だから独習出来るので何時でも出来る方便があつて都合がいい、笛を習う期間中は棒切れを口に当て指を動かす等手ついで歩く時は柄を笛にして指を動かす等手に持った物は皆笛にして練習するのであつた。大正年間の話である。笛を教える者の畑とおそわる者の畑が隣り合つて居た。三日間二人で畑に弁当を持って行き乍ら陸稲の草を一本も抜かずに畑の桑の蔭で笛を教えたという。こうして教つた者は大正中笛の名手として知られて現在も古老はその名手振を話題にしている程熱狂した者も居たのである。祭囃子は都市の中にも生きて居り神社の祭りの絶えぬ

のお日待ぐらいが精一杯のたのしみであつた。そんな静かな村で菊田伊左エ門が興行する物は娘手踊り、支那手品、小唄（明治期の流行歌）くらいのもので、子供が見る程の雑芸しか種がなかつた。何とかして面白い種を見付け度いものと思案して居た。たまたま横浜に所用で出掛けたついでに伊勢崎町二丁目にあつた賑座という歌舞伎専門の小屋に入つて見た。此の小屋には、東京歌舞伎の大名題や名門の子弟が東京の座の合間に集つては芝居をやつて居た小屋であつた。伊左エ門は雑芸ばかりではやり甲斐がないので、歌舞伎興行を仕様と考へて居た矢先なので、自分の力で引き抜ける役者を物色した処、小ずんぐりした役者があつて、その役者を自分の興行の手代に使おうと考へて交渉するとようやく自分の手元で働くことを承諾した。その役者は新吾と言ひ、東京大名代市川團十郎の弟子市川新蔵の養子と分つて喜んだ。明治十七年十月に横浜を引払つて菊田家に入居した新吾に伊左エ門はしうとの二女ハマさんを新吾の妻と

限り部落の中に街の中にもはやされて祭行事の添景として永く伝えられる事を祈るものである。

地 芝 居

飯 島 忠 雄

座間郷七ヶ村のうち、座間・座間入谷・栗原・新田宿・四ッ谷の各村が集り座間村となつたのは明治二十二年であるが、この座間村と磯部・新戸両村が集つた新磯村の人たちを中心に素人歌舞伎が始められた。義太夫は江戸の末から始まつて居たが歌舞伎が座間近辺で俄にはじめられてその影響で素人が歌舞伎に熱中したのはそれ相当の原因があつた。それは上宿の人で菊田伊左エ門という者があつて大の興行好きであつた。当時の一般の人達には小銭を賭けたばかりか義太夫、碁、将棋くらいが楽しみで、女達は念仏講や不動講、縁日灸をすえに遊びがてらに家を出ることや女

してめあわせたのである。それ以来伊左エ門は雑芸興行を止めて新吾を頭取とした歌舞伎興行師として立ち上つたのである。伊左エ門は興行名で二代目、俗名直吉、菊田氏に入り伊三郎と改めた菊田氏二代は興行の外事業が好であつたらしい、下溝に水車屋を経営して居たので通称車屋の直さんと呼ばれていた人で谷戸の島村家からむこに來たのであるが、何故か戸籍上では四ッ谷の川島某二男と記名されて居る。その直さんは歌舞伎興行する時には新吾に役者を集めさせた。新吾は東京歌舞伎と横浜の「賑座」の頭取と一諸になり互に助け合い乍ら名門の子弟を借りる事に成功した。こうして歌舞伎興行が隆盛になつて來ると座付役者が必要となり旅の役者が菊田座の座付となつて定着する。旅役者の住居は菊田座付近ということになつて、座間上宿、下宿、中河原等の百姓の部屋や物置なども改造して旅役者を落付かせた。新吾（後吉蔵と改名）は結婚後五年程たつて一女が産れた。それが菊田澄子さんでかつて帝劇の女優として

活躍された人である。私が菊田座の市川吉蔵の事蹟を細々書けたのも菊田まさ女史を介して澄子さんから父吉蔵の芸歴をこまかく教示して載いた御厚志によるものである。さて、菊田座座付の役者が多勢座間に住んで居た時代に、座間の人達の中に役者について芝居を教わったり、義太夫の稽古を付けてもらったりした、こんなことから地元のお大尽の旦那や生活に余猶のある商人や農家の者達で歌舞伎の演技に魅せられた者共がおれらも一と芝居ぶつべえかというので始めたのが素人芝居のはじまりとなつた次第である。新吾も素人芝居を仕込んだ。生駒太夫が芝居が好きと義太夫にこり出したのも新吾の芝居の影響と私は見ている。さて旅役者が座間に住み付いて菊田氏の座付役者となつた者は、僅かの手がかりから知り得た者は左の通り。

中村時蔵 初め磯部に住み後荻野へ移住
中村海老蔵 住所不詳東京の役者とも言う
中村桐太郎 下総佐倉の出身者あだ名は桜ッペイ、鈴鹿の石井関次郎方に寄宿中病没

て人形芝居の仲間に入って人形を遣つたといふ話も残つて居る。三郎は酒好で女房があきれ返つて無断で家出をしたままで老い朽ちた此三郎は誰も世話をしてくれる者がないまま病没したという。

大勢の役者を抱え込んだ新吾は、彼等の生活のために、興行の手を上げた。高座郡、愛甲、津久井から神奈川県中興行を打つて廻つた。役者の芸については、団十郎と義父新蔵の芸風を主として菊田座の芸の筋とした。平たく言えば菊田座の芸は団十郎の芸がかんばんだということである。抱えている役者の持芸も団十郎の芸風に自分で指導して直したという。新吾の当り役は権太、盛綱、熊谷、仁木等であつた。新吾は小作の男であつたので、舞台の履物は駒下駄を使つたという。新吾の奮斗によつて菊田座は田舎の歌舞伎興行師では県下第一と言われる程にのし上り繁栄した菊田座の黄金時代は明治三十年から末年までの十四、五年間で、大正期に入ると菊田座にすきま風が入り初めたのである。明治四十四

中村福之助 俗名蛭間松五郎大神楽蛭間座々長、歌舞伎は中村桐太郎弟子という。
坂田半十郎 入谷住菊田座々付女形専門の役者

坂田半三郎 半十郎子大正八年頃横浜に移住
扇朝(扇蝶ともいう) 下宿安齋某方止宿
岩井繁之丞 座間住後平塚に移住、繁之丞の子が新劇団大和屋を起す

露香 厚木住
源五郎 秦野住三桝屋という新吾に教わる。

市川柿之助 三文字屋という新吾に教わる。

市川恵美蔵 下宿住

市川又五郎 愛甲郡三田の人脈座当時からの旧友、よく新吾に協力した。明治二十五年に座間の有志に忠臣蔵を教えた。号幡磨屋私が知り得た役者は以上の通りであるが大正年間まで興行をつづけた菊田氏も興行を廃業した。後にこの人達はどこに行つたらうか。その消息は殆ど不明である。この外壮三郎という役者が中河原の半鐘のとなりに住んで居

年十二月二十五日に初代伊左エ門は五十五才の働き盛りの年令で病没したので、菊田座の運営は新吾一人にのしかかつて来た。後に直吉がむこ入して伊三郎と名を改め二代目伊左エ門を継いだ。新吾という先輩の頭取りが居り名代役者の子であり興行界の顔ききという二方三方の腕ききなので二代目伊左エ門とは名ばかりで、経営一さいは新吾にまかせる以外に口出しは出来なかつた。そこいらから菊田氏の中に言い知れぬ冷たい物が出来はじまつた。前述の芸人達は年中興行があるわけでないから暇の時には近所の者に義太夫を教えたり、二、三人の役者が素人芝居の稽古を付けたたり、農繁期には、農家の手伝をしたり相模川の魚を取つたりして、細々と生活していた。素人の人達が歌舞伎に熱狂したのは、新吾だけでなく座員の役者が粒揃いで見物の衆に人気があつて、義太夫でも芝居でも気軽に教えてくれたことに素人芝居の発展と一生に一度でいいから舞台でおどつて見たい、俺も役者になつて見たいなあと、見ているだけで

は満足出来なくなり一回芝居をやつて見たい
という慾望から有志を募つて素人が歌舞伎芝
居をやるようになったのは明治の中頃からで
ある。古老二十数名から聞き出した素人芝居
の畧伝だが、古老の青年時代か十余才頃の思
い出話なので正確なものではないが菊田の役
者から教わつた芝居の一部を年代順に記して
見ると次の通りである。

明治二十年七月 瀬戸銀之助方庭で披露公演
座員 瀬戸金次郎、齋藤軍次郎、齋藤建蔵、
大塚幾太郎、大塚辰次郎外十三名入谷有志
芸題 鎌倉三代記、太功記二段目同三段目、
同十段目、土橋の一、二段、本朝二十四孝ノ
一、一ノ谷嫩軍記、小次郎先陣、陣屋、全通
し十二幕を上演、昼夜通し四日間も披露公演
をやつたという。
明治二十二年 憲法発布記念 座間有志 瀬
戸吉五郎外十五名
芸題 弁慶上使、忠臣蔵七段目、仙台萩御殿、
同評定 師匠市川新吾、市川又五郎
明治二十五年 瀬戸喜三外十五名入谷有志

その配役は、松王に荒井政五郎、千代に瀬戸
仙太郎、戸浪に瀬戸音吉、玄蕃加藤富作、寺
小屋では小太郎は吉蔵の娘澄子さんがつとめ
た。当時澄子さんは七才であつたという。よ
だれは高橋常吉、曾我の対面の場の配役五郎、
瀬戸清安、十郎、荒井政五郎、朝比奈、加藤
富作、近江小藤太、佐藤正二、八幡三郎、虎
御前、少将の三役は東京歌舞伎の連中がつと
めた。この素人芝居は座間と新戸の有志であ
つた。荒井政五郎氏談
大正三年三月十七日 新戸三浜 披露 鈴木
源三、飯島七作外十名、座間入谷合同有志
芸題 本朝二十四孝、忠臣蔵九段目、妹背山
婦庭訓、番町血屋敷、陣屋
大正三年八月一日 鈴鹿明神祭礼に披露公演
齋藤正良外九名入谷有志
芸題 忠臣蔵七段目、寺小屋、嫩軍記二、三
段目
大正六年 一杉直之外十名、皆原、鈴長合同
有志
芸題 忠臣蔵七段目、矢口ノ二、三、饑七、

芸題 安達原祭文、忠臣蔵、二幕芸題の内訳
不詳

明治四十年 有山七郎外十名入谷有志、披露
公演は有山七郎宅の庭で行つた。

芸題 安達ノ二、陣屋外二幕
明治四十三年 瀬戸吉五郎、小俣常行外八名
座間有志

芸題 太功記、桔梗の旗上外二幕
明治四十四年 佐野銀蔵、本多定治外十名、
新田宿有志

芸題 鎌倉三代記、太功記十段目、源太勘当
の場外一幕、本多定治翁談

大正元年二月 菊田座頭取市川新吾改名披露
興行、舞台は現在の山本米店の裏あたりに舞
台掛をした。此の興行には新吾の義父新蔵の
門人、団十郎一門をあげ後援出演したので、
前代未聞の大芝居であつたといわれている。
市川新吾改め市川吉蔵となつて新しく活躍の
舞台を踏み出したのである。披露興行は二日
行われたが二日目の切狂言に吉蔵から教つた
素人が曾我の対面と寺小屋二幕を上演した。

布引、

大正六年九月 依智山祭の祭礼に買われて披
露、齋藤正良、齋藤角蔵、丸塚萬治外五名、
入谷有志

芸題 寺小屋、安達ノ三、太功記十段目、仙
台萩御殿、

大正六年三月十三日 星谷寺開張余興、星ノ
谷有志 新派劇、山田新太郎、江成信司外六
名

芸題 金色夜叉、不如帰二幕

大正七年三月 島村詰蔵外十名入谷有志

芸題 安達ノ二、あばら屋、二十四孝、鎌倉
三代記

大正十四年三月 鈴木利丸外六名新田宿有志

芸題 曾我ノ対面、鎌倉三代記外一幕

昭和三年三月四日 吉川孝衛外九名入谷有志

師匠中村福之助

芸題 太功記十段目、寺小屋、鎌倉三代記、
嫩軍記ノ二段目

昭和三年四月 林宗七外五名入谷有志

芸題 太功記十段目、寺小屋、源太勘當場、

嫩軍記ノ二

昭和四年四月三日 老人歌舞伎 師匠中村桐太郎、太夫、盛太夫、二代目新太夫 出演者 飯島長兵衛八十二才入谷、鈴木源三六十二才座間、黒沼清太六十五才、菅沼盛三七十才勝坂 若手出演者高橋清一新田宿、金子秀夫小役入谷、吉川一美入谷。

芸題 嫩軍記ノ二、苜萱道心、安達ノ二、沼津、座間の昭和館で披露した。三日、四日の二日間の公演であったが、老人歌舞伎で八十以上の爺さんが芝居をやるということで評判が拡まって、二日間の興行では見ることが出来ない者が沢山あって、太夫元に興業延期を申出されて又三日間の延興行をやった程人氣が沸騰した。同年の秋に新戸の有志の希望で新戸の三浜館で二日間の興行をしたら、つづいて大塚館でも公演した。翌年の正月号の婦人倶楽部では舞台写真を入れて珍らしい老人歌舞伎劇と銘打って掲載して紹介された。昭和五年三月 老人歌舞伎の若手連だけで結成した歌舞伎吉川一美、窪田与作、高橋清一

金子秀夫、小泉高三、老人歌舞伎から菅沼盛三が加わった有志一座である。

芸題 安達ノ二外四幕

以上が私が知り得た素人歌舞伎の稽古披露の概畧だが外に新田宿で一組、四ッ谷に一組、栗原に一組、皆原、大門合同の一組があるが、その概要が握れないので割愛する。

附記、素人芝居の外に地芝居とも言った。この起りは、玄人を入れない地元の有志だけが結成した素人劇団を言うのであろうか、歌舞伎の太夫は菊田座隆盛の時代は座付役者が床淨瑠璃を語ったことであらう。地芝居の盛行中に菊田座は解散したが、その後独立した太夫元に専属した床語りの太夫は素人芝居の床を語ったり義太夫を教えたりして生活したものであろう。田舎の芸人の収入源は、各部落の氏神の祭礼の余興が多数を占めて居り、素人芝居の披露公演は社会経済の変転によって中絶したり復興したりしてプロ芸人の生活を満たす程の興行はなかったことは、私の調査内容からも判断出来るのである。遊芸は景

氣不景氣の反応に左右されているので、盛行期と不振期とは平行しないのである。日露戦争後は盛行するが、支那事変から敗戦直後にかけては遊芸は影をひそめた。戦後三十余年を経て、人心の安らぎを味う時に再び歌舞伎熱が発祥したのが入谷歌舞伎である。

先に述べた菊田座々長市川吉蔵が座間在住三十余年に与へた地方への歌舞伎愛好の熱は広く高い、百姓や商人の者でも家業を捨てて歌舞伎道に入った者は数知れなくあった。吉蔵没後、田舎歌舞伎のプロとして活動した大正期の役者達の中に何人かは吉蔵に指導を受けた者もあるうし、菊田座の舞台を踏んだ者もあるにちがいない。その人達は中村時次、市川緑、市川伝幸、沢村国太郎、酒田金十郎、中村兼三郎以上が大正から昭和初期迄の地方役者で、吉蔵の巡業先は是等の人達の足元で、何れも神奈川県下の役者であったので、何らかの関係があったものであろう。

大正五年に二代目菊田伊左エ門の病没によつて吉蔵は座の経営に見切を付けて菊田座を

閉鎖した。それ以後吉蔵は菊田家を離れて娘の澄子さんの東京の家に住むようになった。興行や芝居を止めることなく座間地方に出て旧知の役者と俱に興行したり祭礼芝居に出たりして終生歌舞伎に親しんで居たという(本多仙蔵氏談) 吉蔵は老後澄子さん方に住み昭和十九年二月九日行年七十九才で世を去った。生涯を歌舞伎を楽しんで通した真の芸の鬼ともいふ可き人柄であった。俗名伊藤悦次郎、法号明生院悦寿範秀居士

座間市内の地芝居と菊田座の調査は昭和四十四年の春から初めたものですが、真相の一部しか資料が見当りませんでした。是に御協力載せました菊田まささん、瀬戸藤兼、片野富治、菊田澄子の皆様に厚く御礼申し上げます。同時に物故された本多仙太夫、沢柳昇一郎のお二方の御冥福をお祈りして、稿を終わります。

今も行われている入谷歌舞伎
(市指定無形文化財)



鈴鹿明神の棟札

飯島忠雄



寺や氏神の社殿、本堂の建立や建替への時には遷宮、再建等の棟札が必ず掛けられている。この棟札の銘文の年季銘がその寺社の建立若しくは再建の年代を知る唯一のポイントとなり、作り散らしたこぢ付けの由緒書より、信憑性があるのであって、棟札の銘文には疑問を差し挟む余地がないのが当り前だが、中

には棟札を書いた者の勘違いか、疑問を持つ棟札もある。その一例として鈴鹿明神の弘治二年銘の棟札について考証して見たい。弘治二年に鈴鹿明神の社殿を建立したことは疑えないことだが、私の腑に落ちない一行の銘がある。棟札の銘文は左の通りである。

表 相州田倉郡渋谷庄座間郷

遷宮鈴鹿大明神再造成就処

弘治二年_{丙辰}五月二日

大丹那北条菊丸殿

此の棟札の原書は薄墨で書れていた物で、近年に何者かによって濃墨で原書の上に書直されたものである。

裏 造畢之八月千足 施主若林大炊助

右奉 为天長地久御円満当郷安穩諸人

快心中所本願子孫繁栄 如件

この棟札の文書と筆蹟は原書とまるつきり違ったものだが、よく見ると、原書の筆蹟の一部が見えるところから、御家流の筆蹟そっくりで、江戸初期に造られた物と見なされるのである。私は元の棟札が紛失したので、原物



鈴鹿明神棟札

通りの棟札を再製したのではないかと想像しているのである。次に棟札の表と裏の銘文について考察すると、表の大丹那北条菊丸殿とある一行である。菊丸とあるのは正しくは北条菊寿丸という人で、棟札は寿の一字を書落しているのである。氏子や神主が氏神の棟札に記入する国主の名前の字を書き落すなどは軽卒すぎるが、そこにうたがうものが出来たのである。北条菊寿丸は、北条の資料によ

ると、初代早雲の子で、成年に長綱と言った。晩年は幻庵と号して戦塵から離れて、小田原の久野に閑居して風流三昧に世を送り、北条氏が滅亡する二年前の天正十六年に九十三才で没した。北条氏一族の最長老であった。早雲は永正十五年に、二代氏康に政権を譲る前に一門の所領替をした。当時の入谷全区は、星谷寺十五貫文として公称した領分で、永正十五年までが長綱の所領地であったが、所領替えによつて、長綱領の入谷は二代目の氏康にあたえられたのである。したがつて、鈴鹿明神の社殿が再建された弘治二年には、星谷寺十五貫文の地は氏康領であつたはずであつて、棟札に書く大丹那は北条氏康殿と書くのが正しい、事実氏康の支配下に任んで居た氏子が自分の領主が誰であるか知らぬ訳がないのであるから、北条菊丸殿と書いたことは大きな誤りである。棟札の表の年月は五月二日とあつて、裏面の月日は八月五日で遷宮式（上棟式）が五月二日で、落成したのが八月五日であつた。施主若林大炊助という人は、

龍源院文書によると、龍源院の開基（中興）になつた人物で、座間、入谷の若林氏の先祖だとされて居るが、この人の事蹟は何も残つて居ない上に北条氏の家臣でもなく、全々資料のない人名である。施主の千正は、北条氏の貫高表から割出すと、金一分に相当する。一分は一両の十六分ノ一で、永樂錢（民国錢）二百五十文（二百五十枚）である。次に裏面の文字の組合せが江戸時代の文章様式臭いのである。右ハ天長地久の為、御円満、当郷安穩、諸人快心、本願する所子孫繁栄を申す旨件の如しと読むのであろうが、私の読み方は、「快心」の下の中は「申」でなければ読みが通じないと思う。是等の諸点を総合して此の棟札は吟味する必要がある。猶棟札の裏の平面が丁斧で削つたのでなく、何となくカンナを掛け跡がありそうに見えるのである。建築に大工がかんなを使用し始めたのは、江戸初期に近い延宝頃というから、八十余年前にかんなが有るう筈がないのだ。なんでも古い物は文化財だという觀念があるが、ロク

な調査もしなくて、自己満足的な見地で指定すると、とんでもないことになるので、鈴鹿明神の棟札の検討を始めたのである。

失われた村

鈴木芳夫

一 暴れ者の相模川

新田宿などの記録によると、寛政八年（一七九六）から明治二八年（一八九五）までの百年間に、相模川の堤防の決潰したことは三〇回、六四ヶ所で、年平均約六〇メートルずつ決潰している。最も多い年には八ヶ所、延べ約千メートルの堤防が決潰した。相模川が如何に「暴れ川」であつたかよくわかる。いつたい相模川は、四キロメートルほど上流の相模原市下溝のあたりまでは、兩岸の切り立った崖の間を流れて来て、同市の磯部で平地へ出るのであるが、そのすぐ下流の座間市内では、まだ流れも急で、「暴れ川」で

あるのはもつともである。従つて、洪水などにより流路も大きく変り、時には耕地のみか集落などまで押し流してしまつたことも、幾たびかあつたことと思われる。そのほか相模川沿いの平地の東側の台地上や栗原方面において、時代の変遷に伴い、亡び去つた村、或は集落も、幾つかあつたのではないかと思われる。まだ研究も行きとどかず、資料が十分でないが、今回はそれらの村について、少しく探ってみたい。

二 今田村

まず相模川の流路の変化により消失してしまつた村の一つに、今田村がある。正保元年（一六四四）幕府が命令して作らせた諸国の地図のうち、相模国高座郡（現在の藤沢・茅ヶ崎市より相模原市までの地域）の地図を見ると、現在の新田宿（地図では「座間新田」）と相模原市新戸との中間の西方相模川に沿つた位置に、「今田村」という村が記入してある。現在の座間中河原か相模原市の新戸河原と思われるような位置である。

更に元祿十年（一六九七）矢張り幕府が命じて作らせた地図にも、同様を位置に「今田村」が出てゐる。しかし、天保六年（一八三五）に幕府が作らせた地図には、この「今田村」は消えている。これは恐らく、今田村が江戸時代初期に、相模川の流路の変化のため消失してしまつたことを物語つてゐるであらう。

今田村に関する資料としては、現在のところ、この地図しか見當つてない。明治一八年生れの中河原の故沢田倉之輔氏に尋ねてみたが「そういう名の村があつたことは聞いてゐる」とのことであつたが、その他のことはわからなかつた。江戸初期の文書をもっとよく探がしてみれば、何かわかるかも知れないが、現在のところ、石高、戸数などは勿論、消失の年代や、その住民の行方など、全くわかつてゐない。

ただ一つの参考は、中河原の西方の現在の相模川の河原に近い処に「近江屋通り」という字（あざ）があることだ。新田宿の老人に

下駅のあたりから、相模川左岸用排水路に沿つて、座間電報電話局の西側に至り、県道の相模線跨線橋のあたりで相模線を越え、その西側に出てからは同線に沿ひ、海老名市との境に向つてゐることがわかる。

この用排水路・相模線の線を東限として相模川が流れてゐた跡へ出来てゐるのが、河原宿の西半部の上（カサ）河原と下（シモ）河原の小集落である。この二つの小集落には、豊臣徳川両氏の争いであつた大阪の陣（慶長一九年Ⅱ一六一四Ⅱと同二〇年）に参加した者がある、という伝承があるが、それ以上古い伝承はない。また河原宿が鎮守としてゐる皇太神宮社は、相模線西側の田圃の中にあるが、同社をここへ祀つたのは、慶長一九年と伝えてゐる。

そのほか下河原の屋敷地の地割りをみると、或る程度計画的に開拓して、住民を定着させた形跡があるし、皇太神宮社のあるあたりは、伊勢新田という字であるが、そこには「高土手」と呼ばれて、水田開拓のために、邪魔と

聞いたところでは、昔山際（厚木市）に「近江屋」と呼ぶ酒屋があり、そこへ酒を買いに行く道が通過してゐた処だ」ということである。これはそのまま信じ難いし「近江屋」もこれでよいのかどうか。「オーミヤ」であれば「大宮」でも意味は通じる。この付近の何処かに大きな神社があつて、「大宮通り」とはそこへ行く道であつた、ということも考えられなくはないのである。

江戸時代初期でさえもこのようである。ましてそれ以前の時代には、記録にも残らず、云い伝えですら消えさつてしまつた村が、幾つかあつたことは、充分考えられることである。次にはそうした村を探つてみよう。

三 心岩寺旧地周辺の村

国鉄相模線に沿つて、下河原、河原宿、大下河原などの地名が残つており、この辺の田圃の下は、一メートルも掘らないで砂利層になるので、この辺を相模川が流れたことは明らかである。現地の微細な地形をたどつてみると、その流れた東の端は、国鉄相模台

なつた玉石を集めて積み上げた処も、田圃の中に残つてゐる。実は皇太神宮社も、そうした土地の上に祀られてゐるのである。

このようにして、河原宿の成立は、どう湖つても、この地方が小田原北条氏の支配を受けるようになってからで、だいたい戦国中期以後のことと思われる。

河原宿の成立が戦国中期以後とすれば、石河原が水田に開拓できるようになるまでには、およそ数十年はかかるであろうと思われ、実際相模川が河原宿のあたりを流れてゐたのは、ほぼ戦国初期（一五〇〇年前後）までであるうと考えられる。

相模川が古代からずっと河原宿のあたりを流れてゐたとすれば、その西岸から、現在の相模川の西側の崖までの空間は、いったいどうなつてゐたであろうか。少くとも「今田村」があつた事は、その村名からみて明らかであるが、そのほか、現在でも、中河原、新田宿、四ツ谷の集落がある。人口の少なかつた古代としてはわからないにしても、室町時代にな

っても、この広い空間に、住民が一人も居なかった、ということは、考え難いところである。

この問題を或る程度解明する手がかりとなるのが、心岩寺の伝承である。

心岩寺は座間駅から市役所へ行く途中の崖下にある禅宗の寺であるが、山号は「座間山」である。文化財・遺跡めぐりなどで同寺を訪れた方の中には「座間入谷にあるのに、座間市を代表するような山号なのは、何故であろうか」と思われた方もあるかも知れない。

実はこの寺は、もと前記の河原宿の皇太神宮社の西隣りの地にあったのだが、相模川の洪水のため流失してしまつて、現在の地に移つたのだ、という伝承がある。そして、明治十二年に、神奈川県の手によつて編成された「皇国地誌座間入谷村誌」によれば、その洪水の年代は文安年中（一四四四～四九）としている。心岩寺は明治三年に焼失しているので、記録類も多く失われ、詳細は不明であるが、明治初年においては、何等かの根拠もある

つたことであろう。

この心岩寺に関する伝承と記録は、他に否定すべき根拠もないので、一応素直に認めてみる時、河原宿のあたりを相模川が流れていたのは、室町時代末期ということになる。そして、心岩寺が前記の位置にあったとすれば、その周辺のどこかに、必ずそれ相應の集落があったものと考えられる。或はそれは「座間郷」の中心的な集落であつたかも知れないし、それであれば、心岩寺の山号が「座間山」であることもよく理解出来るのである。

この心岩寺に関する伝承と記録を認める限り、現在の河原宿のあたりには、室町末期には亡んでしまつた村があつたことになるわけである。

もつとも、心岩寺の初代住職は文明一二年（一四八〇）に、開設者白井織部是房は文明元年（一四六九）に死んだと伝えられているので、文安年中に心岩寺があつたかどうかはわからない。あつたとしても、洪水が果して文安の頃であつたかどうかはわからない、という

人があるかも知れないが、これに対しては、次のように、ほぼ傍証となるようなことがあるのである。

四 雉子の尾の村

相鉄入谷駅東南方約百メートルくらいのところに、桜田伝説の主人公桜田姫の墓地と云はれているところがあつた。そこは、巾約四メートル長さ約六メートルくらいの空地で、周囲の田圃より三〇センチメートルほど高く、細い桜の木が生えていたが、昭和一三年頃、耕地整理のため消失してしまつた。その時まで、そこには板碑があつたのだが、それも失われてしまつた。飯島忠雄氏によれば、それは貞治二年（一三六三）と康正四年（一四五八）のものだつたという。康正は三年（一四五七）までしかないので、多少どうかと思われるが、板碑が存在したことは事実である。板碑は主に鎌倉時代から室町時代にかけて、関東地方で多く作られた。先の尖つた板状の石の供養塔で、墓石として立てられたものもある。しかし、この板碑は、伝説では桜田姫

の墓石であるが、事実は誰がどのような目的で建てたものか、全くわからない。

それにしても、この板碑はその近くに住んでいた人によつて立てられたもの、と考へるのが順当であろう。では、その人は何処の村に住んでいたであろうか。

最も近い座間高校の近くの根下の集落にしても、直線で四百メートル以上離れていて、中間に深い湿田がある。

四ツ谷は、もとは、もつと相模川に近い現在の三屋のあたりにあつたものが、洪水のため現在にの処へ移つた、と伝えられている。前記の皇国地誌の四ツ谷村誌によれば、この地に人の移り住んだのは元龜二年（一四七一）であるという。また、四ツ谷の鎮守の日枝神社も元龜二年に創建されたと伝え、浄土寺の初代住職門悦は元和五年（一六一九）に死んだと伝えている。江戸初期には「座間四ツ谷村」と称していたし、「元龜二年」と特定出来るかどうかはわからないにしても、四ツ谷の成立は、室町時代までは溯らないことは確かである。

あろう。そして、川原宿の成立も、前記のように室町時代には溯らない。

(ついでに触れておくが、新田宿は、その鎮守の諏訪明神も専念寺も慶長中の創建と伝え、屋敷地の地割りも中央部は計画的であり、しかも最初に書いたように、江戸初期には「座間新田」であつたしするので、新田宿の成立も、河原宿とは余り隔らない頃であつたと思われ)

さて、このように前記の板碑を立てた人の住んでいた集落が近くに見当たらないとすれば、その人の住んでいた集落は、既に亡んでしまつたと考へるほかはない。

この板碑の立つていたところは、用排水路に沿つて、ずっと細長く小高くなつていて、「雉子の尾」という地名であり、十戸や二十戸の集落なら、今でも十分成立し得る余地がある。まして、相模川が近くの「牛池」というところまで流れて来ない頃は、村が成立するに適した土地は、もつと広がつたであろう。こう考へると、雉子の尾あたりに集落が存在

在していたことは充分考へられるし、それは室町時代の何時頃かまでは存在しており、相模川が近くまで流れて来てしまつたため、人々はそこを立ち去り、集落は亡んでしまつたといふことも十分考へられるのである。相模川の堤防を築くために、おしなという娘を人柱として生き埋めにした、というおしな坂の伝説も、或る程度は、こうした史実を反映しているものであろう。

雉子の尾の村が、相模川が近よつて来たため、室町時代の或る時期に亡んでしまつたとすれば、心岩寺に關する伝承も必ずしも否定は出来なくなる。云い替へれば、河原宿のあたりを相模川が流れたのは、室町時代の或る時期(多分中期)以前であり、それまでは、相模川はもつと西方を流れていたのであり、河原宿のあたりにも、現在とは全く別な集落があつたと云い得るのであろう。

このように相模川の流路の変化により消えてしまつた村は、まだほかにある。

五 田中の村

昭和三八年春座間電報電話局の基礎工事の際、地下五メートルくらいまで掘つたところ、上半部は黒土で、下半部がローム層(赤土)

であり、砂礫層はその下であつた。これによれば、このあたりを相模川が流れたのは、少くとも一万年数千年前である。ところが用排水路から西では、前記のように、一メートルも掘らずに砂礫層がある。地表は一と続きのように見えても、地下はこのように違ふのか、と今更のよう思つたが、それよりもつと驚いたことは、掘り出した黒土に混つて、土師器(はじき)片が多数出て来たことである。

土師器とは、大体千四、五百年くらい前から、千二百年くらい前に作られた、素焼きの植木鉢のような土器である。当時周囲をバラ線でかこんで工事をしていたため、中に立入ることが出来ず、ベルトコンベヤーで上つて来る土から見つけ出すほかなく、詳細は知り得なかつた。ただ、拾つた土器片を専門家にみてもらったところ、それは、およそ千四、五百年前の鬼高式と千二・三百年前の函分式

のものであることがわかつた。云い替へれば、このあたりには、その当時、何ほどの集落があつたことが確實になつたのである。

その後、電話局南方の県道工事でも、これに似た土器片がほつほつ出ていた。これによつても、電話局下に見つかつた集落は、かなり広く広がつていたことがわかつた。そして、鈴鹿以南の崖面に数多く残つてゐる横穴(おかけつ古墳)に埋葬された人々の住んでいた村の一部が明らかになつたのである。

いつたい、座間公民館から入谷バイパスまでの県道の両側は「田中」という地名であつたが、昭和の初めまでは、座間小学校以南は人家はなかつた。地名からすれば、何ほどの集落があつて然るべきなのに、不思議なことであつた。しかし、相模川が用排水路の線まで流れて来たとなれば、この田中であつた集落は立ち退かざるを得なかつたであろう。恐らく、この集落は「田中」という名で、立ち退いた後、「田中」という地名だけが残つたものと思われる。

もつとも電話局下から出土したものは、奈良時代までのものであるので、相模川が用排水の線まで流れて来た室町時代中期までとは、かなり隔りがあるし、この立ち退いた田中の集落が、果して、奈良時代、或はそれ以前からの集落に続くものであるかどうかは、まだ簡単には決まらぬ。しかし、前記のように、雉子の尾の近くに集落があつて、室町時代まで続いていたとすれば、その集落は或は田中のどこかにあつたのかも知れない。云い替えれば、「雉子の尾の村」と私が呼んだものと、田中の集落とは同一であつたかも知れないのである。

要するに、田中には確実に千四、五百年から千二、百年くらい前までには、集落があつたのであり、それは或は室町時代中期までも続いていたのかも知れないのである。

もし奈良時代でこの集落が亡んだとすれば、それは、室町時代と同様、平安時代初期にも、相模川が用排水の線まで流れて来たことがあつたと考えられるし、室町時代に亡びた集落

は、現在の河原宿などと同様に、その後になつて成立したものかも知れない。

六 座間西裏の村

電話局に出た千四、五百年前から千二百年くらい前の土器（鬼高式と国分式）は、座間下宿の用排水路際からも見つかつている。田中の集落と続いていたのかどうかかわらないが、座間の上宿から下宿へかけての西裏は、昭和の初めまでは殆んど畑であつたし、現在でも残っている畑には、土器片が散らばっているところが多い。多く細片で、時代的にはつきりしないが、中には前記のように、千四、五百年前のものもあるし、奈良時代までしか作られなかつたという、須恵器の破片の散布しているところもある。更にまだ正体不明な穴蔵のようなものも、下宿では見つかつている（昨秋発掘）。このようなことからみれば、座間の西裏には、相当古い時代から、集落のあつたことは確かである。

現在の座間大通りは、江戸初期、領主の内藤清成により、市場として開発されたと伝え

られており、座間入谷の方より移住したと伝える家も幾らかはあつて、むしろ後世に発展したものである。

恐らく相模川が用排水路の線まで流れよつた時、西側に開けていた水田に依存していた座間の西裏の集落は、大きく衰微してしまひ、やがて相模川が西方に移つて、再び水田が開けるようになった戦国中期以後、ようやく再生に向つたものと考えられるのである。

七 鎌倉街道の宿場

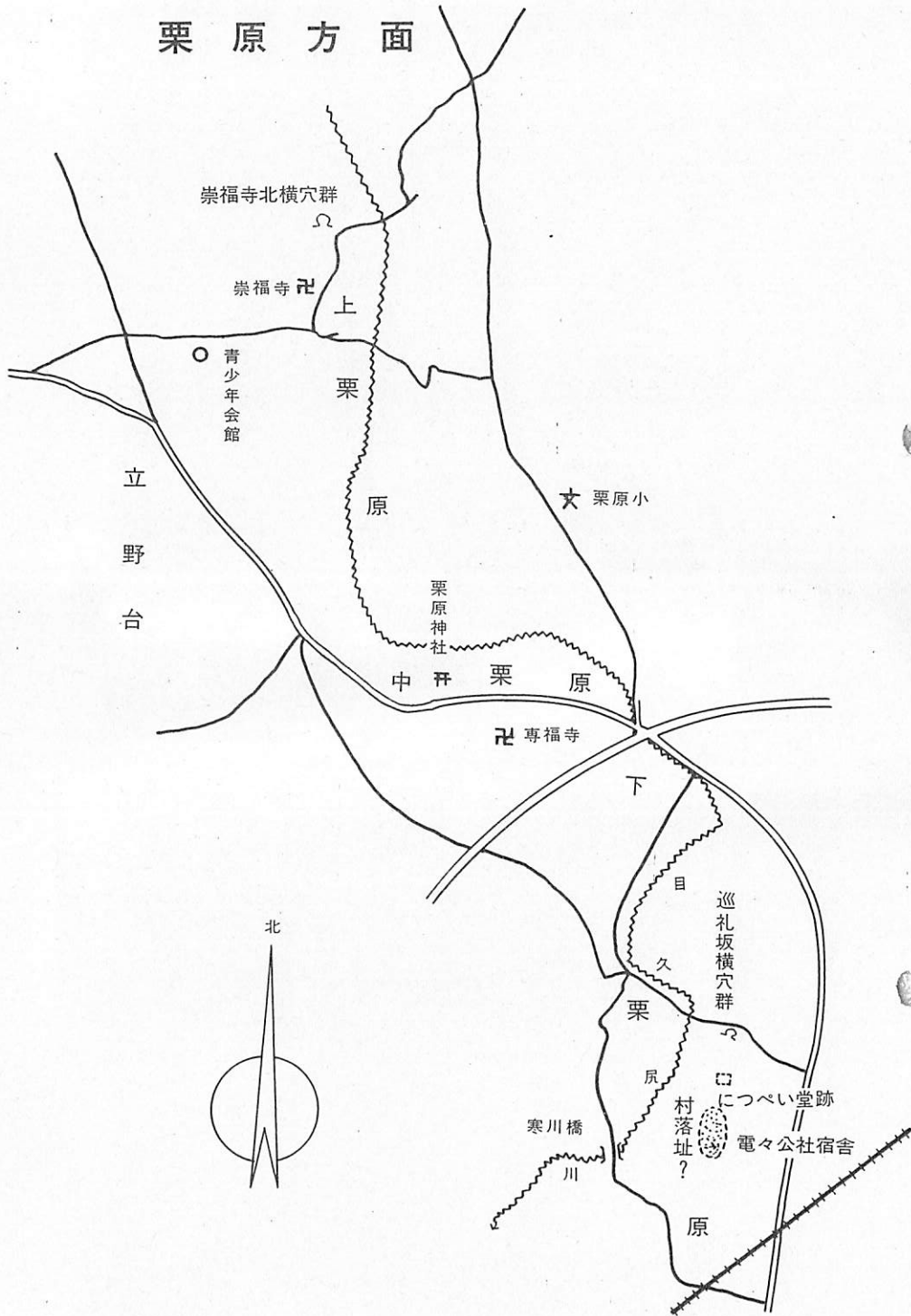
市指定天然記念物の護王の大櫨の生えているところは鎌倉街道の跡である。その跡は大櫨の北の農道に面したところで明らかにわかる。それは北側の浅い谷に面した崖面が、下端の中約十二メートルほど切り下げてある。こうした切り下げは、この谷の北側の崖面にもあつたが、旧陸軍士官学校（座間キャンプ）を作る時、埋め立てられてしまった。現在、他に残っているのは、大櫨の南側の谷の南側斜面である。この方は西側は形が崩れているが、東側は整った形で残っている。

ここを通つて相模原市新戸の方に向う道を、江戸時代から「鎌倉古道」又は「鎌倉街道」と呼んでいる。伝承歌謡でも「鎌倉街道飛ぶ鳥は羽根が一六 目が一つ 云々」と唱われている。（各地に類歌があるが、たとえば平塚市内では「大山街道云々」としているところがある）

これだけの土木工事をしたのが江戸時代なら、そのことについて何らかの伝承なり記録が残っているであろうが、それが無いというのは、この工事は江戸時代以前であつたであろう。しかし、戦国時代としても、小田原北条氏が、座間のこのような処に、これだけの工事をする必要は考えられない。室町時代にしても、関東管領がそれだけの力があつたかは疑わしく、やはり鎌倉幕府の権威が強大であつた頃に築造されたものと考えるのが、一番可能性が大きいであろう。

室町時代に成立したといわれている唐糸草紙の主人公が、鎌倉で源頼朝に仕えていた母をたずねて鎌倉へ行くのに、木曾（長野県）

栗原方面



を出て群馬県を過ぎ、埼玉県を南下するが、以下「入間の郡、やませの里、いくらの里か越しつらむ。曇らぬかげは星の谷の、とかみ河原をもち過ぎ、鎌倉山につき給ふ。」とある。「とかみ河原」は「砥上が原」と考えられ、現在の藤沢市辻堂一帯である。「星の谷」は海老名市にもあるが、これは目尻川谷の支谷で、街道の通過するような地形のところではない。他には、座間入谷の「星の谷」で、この星の谷に近接しては、既に鎌倉初期には星の谷観音堂が存在しており（嘉祿三年一一二七〇〇紀梵鐘が現存）、星の谷のあたりには人家があり、街道が通過していたことは、十分に考えられるのである。とすれば、前記の道路築造の跡とみられるところが、その街道であったものとも思われる。

かつては、座間キャンプの北の部分には、天神社があり、富士山公園の頂上に浅間神社、その西南麓には日枝神社があった。これらは現在座間神社境内に移されているが、この三社の旧位置では、座間の人々の神社としては、

少し集落より離れすぎている。市内の他の神社はもつと集落に近接するか、集落内にある。前記の三社は創建の年代は伝わっていないが、かつては他の神社のように集落に近接していたとすれば、その集落は座間キャンプのあたりであった、或は鎌倉街道に沿った宿場であったかも知れないのである。

そして、室町時代末になって、鎌倉が衰えるにつれ、旅人も絶えて、この宿場もしいに衰微していったであろう。やがて戦国中期に、台地の西側の平地に水田が再び開けるようになると、僅かに残っていた人々もみな、座間大通りの方へ移ってしまったのではあるまいか。だからこそ浅間神社や日枝神社は、座間入谷の谷戸などの方が近いにもかかわらず、座間大通り周辺の人々が氏子になっっているのではあるまいか。

ただ、なにぶんにも座間キャンプがあるため、手がかりになる遺物も遺跡も発見されず、或は「幻の村」かも知れない。

八 栗原方面の村

栗原には、下栗原の巡礼坂に四基、上栗原の崇福寺北に四基、横穴（古墳）が発見されている。これらは後期の形式のものであるので、既に千二、三百年前には集落があったのは確実である。しかし上栗原の方では、まだ何の手がかりもない。

下栗原の方では、電々公社宿舎の工事の際、その西端に近いところに、横穴の時代に近いとみられる住居址があったが、いろいろを関係で、発掘調査ができないままになつてゐる。この宿舎の北側には「につべいどう」とも「いっぺいどう」とも呼ばれてゐるところがある。そこには、お寺やお堂があったものか、畑の中に方形のやや高い処が見られる。あるいはこのあたりに、何時の時代かに集落があったことを物語つてゐるかも知れないが、まだ調査らしいことはしてゐない。

九 そのほか

以上のべて来たほか、座間入谷の長宿や牛王西や星の台にも土師器片が散布してゐる畑

があり、また皆原の方にも、集落でもあつたような形跡もあるが、まだ資料が乏しいので、次の機会に書きたいと思う。

明治時代の栗原 その一

大矢助次郎氏遺稿

「栗原の歴史を語る」より

（解説）大矢助次郎氏は明治十五年、中栗原（栗原三〇六二）に生れ、座間小学校高等科を卒業後、栗原小学校の前身である馴養小学校の准教員となり、その後検定をたびたび受けて、遂には中等教員（今の高校教員）の資格を得られ、昭和二十七年、横須賀市立工業高等学校長を最後に引退、昭和三十五年行年七十七才で亡くなられた方です。

この「栗原の歴史を語る」は、大矢氏が晩年、横須賀市に居住しながらも、青

年時代まで、自分を育んでくれた故郷の栗原を憶いつつ

「都市の異常なる発展によって、栗原もやがて首都圏整備の枠内に入ることになるであろうし、住民の構成が全く異ってくるであろう。即ち田園都市となつて、曾ての栗原は幾年かの後には全く忘れ去られてしまふであろう。私がこれを書き残すことも、或は徒勞ではないかも知れない」

と云う趣旨で書き残しておかれたものです。それが、たまたま昭和三十七年栗原学校創立百周年（寺子屋時代より数えて）に当り、当時の座間町教育長故大矢雄次氏ら関係者の努力により、座間第二小学校（今の栗原小）より発行されました。

文中には郷土栗原を愛惜する情が脈々として溢れるとともに、五十余年にわたる大矢氏の教育者としての体験より得られた「歴史」に対する高い見識の裏付けが汲取れます。そして、大矢氏の予言通

り急速に変容しつつある「栗原」引いては座間市に取つても、も早貴重な史料となつているものです。

しかしなにもぶんに十数年前の発行で、発行部数も少く、現在では容易に見ることが出来ず、本来ならば完全な復刻版を作成すべきところなのですが、いろいろな関係で、今回はその一部の紹介に止められた次第です。

できるだけ、本文のままに、と心掛けましたが、一般読者にわかり易くするため、文中単に「弥市氏」とか「二十七年頃」とあるのは「大矢弥市氏」とか「明治二十七年頃」とかに改めました。句読点を打つことや行替えなども、矢張りその趣旨で行いました。また「註」は編者の責任で付けたものです。

以上記して、故大矢助次郎氏のご寛容を願うとともに、読書のご諒解を得たいと思ひます。

編者

一 土地のようす

栗原は目久尻川（或は目穿川）の上流の浅い谷川が作った幼年期の溪谷に発達した聚落である。

東は相模野台地で、西は相模横山の一部鷹峰で、この間二十町（約二千メートル）、北は小池を限り、南は海老名村の柏ヶ谷に接している。この間三十町（約三千メートル）。

谷川は北の方小池川が小池より発して、上栗原・中村を流れ、東の方芹沢川は東牟場川と西牟場川が沖の芹沢で合流して芹沢川となり、下栗原に至つて小池川と合流して柏ヶ谷に入る。

この川は水量極めて豊富であつて、特に芹沢川の水は湧出間もないのにも係らず、涼々として豊かに流れている。如何なる旱天でも決して干涸たことがない。曾って明治二十七年大旱があつたが、決して水量は減少しなかつた。上栗原の入りの谷戸は全く水稲が枯死したが、小池川も芹沢川も水量豊かに水田をうるほした。誠に稀に見る川である。栗原の

住民はこれになれてしまつてゐるが、この川の恩恵によつて、何百年の間住民が生活を営んだかわからない。

そして又この川は魚族が豊富であつた。どじょう、うなぎ、ハヤ、カニ等たくさん住んでいた。芹沢川の上流の牟場川はオランダ水田ガランが繁茂して、川の流れが見えない程であつたが、この芹をまくると清水ガニが沢山とれた。

私達は十才のころ、即ち明治二十四、五年頃、夜灯火を持つてどじょうを捕りに行つた。夕方釣糸をたれるとハヤが二十も三十もつれたことがあり、夕立のあかりにミミズをつないで竹の竿につけて川に立てると、モクゾウガニが捕れたものである。私の兄は四年生の時、魚を捕りに行つて、大きなモクゾウ蟹の為に足をハサミではさまれて、けが（怪我）をし、その傷口から破傷風の菌が入つて、病んで十一年の生命を失つたのである。そして又山にはじねんじよが多くあつた。私は十二、三才の時にも掘を楽しんだものである。

地質はローム層で、その上に富士や箱根の火山灰が堆積して砂壤土を作った為に、土地は肥沃でない。東原の高台は水が少く、よく旱害に見舞われた。しかし谷間にある家のある所は水が豊富で、中井戸はどこでもよい水がわいた。但し高台にある所は水質もわるく、水量も豊かではなかった。つまり川に沿う所は断層になつていて、水脈がそこに集つているのである。水の最も豊富なのは芹沢で、井戸のない家が沢山あつた。沖の芹沢などは特にそうであつた。従つて湧水は温度が低く、灌漑（かんがい）用にはよくなくて、作物のみのりのよくない所も多かつた。

何年前にこの土地に人が住みついたか、それは後に考えることとして、先づ上栗原の西側を流れる運河、上栗原から中村へ流れる神社の横の運河、中村の下から芹沢へぬける運河、下栗原の堰場から下栗原の西側を流れる運河は、これによつて栗原の水田が灌漑されるので、これは同時に出来たものか、それとも順々に出来たものか分らないが、当時の住

民の努力がしのばれる。

栗原には狭いながらも水田があり、東西南北共に畑があり、又山林も多くて、住民の生活は比較的よかつたと思われる。

後でいふように、栗原は大きな地主があつた為に、森林が各方面にあつた。鷹峰、大山、これは東原の水のくぼに近い所である。中村の山中を中心として前と後、専福寺の墓地つづき、中原へ行く途中、これに樹令百余年以上の森林が繁茂してゐた。

今中村の杉浦商店の側の橋を松風橋というのは、あの上に松の森林があつたからである。又中村の山中といわれるのも、前に松を主とした森林があり、後に松と杉をまじえた森林があつたから、山中と呼んだのであると思ふ。専福寺の墓につづく森林は、一方が墓で一方は昼も小暗き森林で、私たちは夕方淋しく一人では歩けなかつた。

それから中村の山下から中原へ行く坂の上つた所に、松の独立した大木があつた。周囲十尺（三メートル）余、亭々として中空にそ

炭も産したので、比較的めぐまれていた、といえるであろう。

びえ、偉容を誇つていた。又沖芹沢に入る所に、赤松の独立樹があつた。実に枝ぶりのよい周囲八、九尺（二・五メートル）はあつたらうか。

これらの森林の所有者は大矢弥市、大矢弥七、大矢善太郎の諸氏であつたが、時代の進むと共に切られてしまつた。私はせめて二本のあの松の木があつたらと思ふことがある。神社の神木である杉は恐らく樹令四百年は越えてゐるのであらう。あれだけは是非栗原の記念物として残しておきたいと思ふ。又神社の檜の大木も銀杏の木も将来永久に手をつけな

いように村民に考えてもらいたい。水田の方の開拓は早く出来たが、畑地の方はおかれていたらしい。通常芝原というところは明治直前に開拓されたもので、私たちが子供の時には、また十分に熟園になつていないようなところがあつた。それはアラクといふ言葉を使つていたからである。

何れにしても栗原は四ッ谷や新田宿のように、水田主の土地でなく、雑木林もあり、薪



大矢助次郎氏 60才頃
下栗原 中村トヨ氏所蔵

二 村民の生活

栗原は東西二十町（約二千メートル）南北二十九町（約三千メートル）。天保弘化の頃（一八三〇～四八）は、戸数一八〇、人口約九〇〇であつた。が、私が教員になつた明治三十一年に調査した時は、戸数二〇八戸、人口一〇〇〇であつた。

明治の御一新で、土地が石高から町段畝歩になり、明治六年の地券発行によつて、土地

が地価金として計算された。一方において町段歩として計算し、一方において地価金をもって計算したことは、ちよつとおかしいが、普通、あそこの家は地価金が二百円あるから一人前の自前の百姓だといわれた。それで明治三十年頃の栗原は、地価が宅地・田畑・山林を合計して約五万円、町歩にして五百町歩余(約五百ヘクタール)であり、座間村(市)全体として地価金二十万円であった。

これらの土地の大部分は小数の人が所有していて、多くの人は小作人である。そしてその小作料が又極めて高い。例えば水田の年貢は一段(約十アール)一石二斗(約一八〇キログラム)が普通である。この栗原の谷戸田では、どんなに丹精しても、段当り二石二、三斗(約三二〇キログラム)取れば上乗である。このうち一石二斗納入すれば残りは一石である。それから肥料代を差引かなければならない。本当に自分の手に残るのは米一俵(約六十キログラム)がそこそこである。畑の年貢は金納であるが、一段は三円乃至

五円である。冬作の大麦は段当り二石(約三六〇リットル)、小麦は八斗(一四四リットル)位の収入はよい方である。大麦は一円に二斗二升、小麦は一円に九斗位であるから、冬作は一段の収入が七円か八円である。夏作は甘藷や陸稲を作るが、陸稲は五年に一度しか収穫がないと言われている程干害を受け易いのである。甘藷は段当り二百五十貫乃至三百貫(九三七―一二五キログラム)。これらの収入を合計しても、一段の夏作の合計は十五、六円である。小作年貢を完全に支払えば肥料代が払えない。

現金収入の主なものゝ養蚕である。春蚕、夏蚕、秋蚕、晩秋蚕と年四回も飼育する。その為に萎縮してだんだん桑の葉量が少くなる。こういう状況であるから、味噌も醤油もお茶もみな自家製造である。油もしめる。着物は綿を買って糸を紡いで、これを染めて、二日目(ふため)一目(ひとめ)とか、一目一日とか、二日目二日目とかのたて綿を作って、これを自分で織ったものである。浴衣を着る

ようになったのは、私が十一、二才になった頃からで、日清戦争(一八九四―五)の頃からである。

普通の食物は、米の収穫の少い処であるから、米食は絶対に出来ない。ただ正月の元日とお祭りの日だけは米の飯で、あとは米と粟と麦の三つの混合食である。普通の家庭では三つまぜといつて、米三粟三麦三の割合でまぜたものを食した。温かいうちはよいが、冷えてくると食べにくいので、湯をかけて流して食った。普通以下になると、米二粟三麦三の割合で、子供達のうちには、お米はどこよと眼に涙、といったのがあった。

私は何んべんも大矢善太郎氏の家で食事をした。これら穀食の外にうどんを食した。このうどんもうどん一式のものは極めてよい方で、カテといつて、大根や野菜のきざんだのをまぜて食するところが多くあった。この様に村民の生活はみじめなものであった。

日清戦争後農産物を増産することに政府も力を入れて、農事講習というのが行われ出し

た。指導者は、水田は収穫段当り三石(約四五〇キログラム)、畑作は大麥段当り三石(五十四リットル)、小麦は二石四斗を目標として進めて指導したので、明治の末年頃には収穫高は相当に増加した。

二百戸を有する部落に商人がなかつた。新屋が酒類・雑貨・呉服類を商つていて、年二回払いで帳面で買った。他には商人がなかつた。明治二十七年頃、杉浦彦次郎氏が煙草や菓子売り始め、遂に呉服・洋品等売り出し、大矢仲次郎という人が豆腐を製造し、酒も売った。新屋の店は明治の末年に閉店した。上栗原や小池方面の人は買物が不便なので、上栗原で大矢国五郎氏が小売りを始めて、明治の末年には稻と物品の融通が行われた。

村の人は多くの物を買う時、又農産物を小売りにするときは厚木に行つた。厚木は相模の中心地で、矢倉沢往還に当り、小江戸と称せられ、どんな品物もあった。又一方町田の方へも行つた。町田は生糸やまゆの市が立ち、二、六の日の市にはポロ市が出た。嫁入り娘

が絹裏のものを買うには、このポロ市によつたものである。よい新しい品は厚木で求め、ポロで安い物は町田で求めた。又大根や里芋や甘藷や茄子胡瓜等を厚木へ売りに行った。大根百本を洗って朝の四時に出て、厚木に到着して、これを三十銭で売ったものである。小作人の現金の貴さは思いやられる。

それから又肥料を買いに神奈川まで行った。往きがけに大麦なり小麦なりを二俵位積んで神奈川に行き、帰りに米糖や干鰯や麦精を積んで帰った。往復十三里(約五十キロメートル)、荷車を引いて歩行した昔の人の労力は、大したものである。

(3)宮の前に栗原の里程原標があった。厚木へ一里三十三町(約六・六キロメートル)、東京へ十三里十町(約五十二キロメートル)、神奈川県庁へ七里(約二十七キロメートル)、藤沢へ四里二十町(約十八キロメートル)、平塚へ五里(約十九・五キロメートル)、横須賀へ九里(約三十五キロメートル)、小田原へ九里(約三十五キロメートル)とあった。

こられた、おばさんがこられた、おとうさんがいわれた、というように敬言を用いた。おじさんが来た、先生が来た、とは決していわなかった。これは栗原の特色といえる。

私が明治四十四年に白根小学校に赴任した時、生徒が「先生が来たぞ」「今先生がめしをくつてらあ」という言葉をきいて、ちょっと変な気持ちになったことがある。

それからもう一つ、栗原は現金収入の道として養蚕をしたと書いたが、この養蚕を大規模に行つたのは、大矢善太郎氏と大矢退三氏であった。両家とも養蚕時には、蚕備(かいこやとい)という臨時の人を入れて、大規模に行つた。一回に百貫目(三七五キログラム)位の繭をとつた。

当時の繭の価は一貫目(三・七五キログラム)三円か四円位であつたから、一回の養蚕で三、四百円の現金収入があつたわけである。現在の物価指数から考えると二十万円位になると思う。それであるから、養蚕の忙しいころは、到底想像がつかない程である。それに当時の飼育法は大変に手間がかかつて、四令

堰上の七五郎さんという人は人力車をひいて生活していた。大矢弥市さんや新屋の人達は東京へ行くのに、平塚まで出て、平塚から汽車で東京へ行った。この車を七五郎さんがひいた。走って十里歩行したのであるから、いくら賃金を貰つたか知らないが、大変な労力であつた。

日清戦争当時は栗原に入つた新聞は十枚はなかつた。日露戦争になつて漸く二十五、六枚であつた。知識普及の程度が思いやられる。

日露戦争当時、台の大矢省三氏が横浜商業学校を卒業し、大矢正純氏の姉君ハツ氏が横浜の県立高等女学校に入学し、次いで大矢一造氏(今の弥市氏)と正純氏が厚木中学校に入学し、大矢喜三郎氏の妻君サダ氏が女子師範学校に入学したのは異数であつた。

それから又、大矢弥市氏の関係からと思うが、栗原は近隣の村落に比して、比較的言葉づかいが丁寧であつた。同氏はよい所に入入りしておられたから、女中等の言葉づかいもやかましかつたらうと思う。例えば、先生が

・五令になると、一夜の睡眠時間は二、三時間であつた。私はよくこの両家へ行つていたので、此の間のことか今更のように思い出される。この間に働いていた娘達のことを、しみじみと思ひ出すことがある。

更に又一つ加えれば、私が子供の頃には、暴風雨があると中村の人達は自分の家で火を燃すことを禁ぜられて、男子は一軒から一人ずつ大矢弥市氏宅に詰めこまれていた。そして時刻になると握り飯を作つて、各家に人数に応じて分配されたものである。私達はふだん雑穀ばかり食つていたのであるが、この時は米の飯が食えたのである。風雨はこわかつたが、この握り飯はうれしかつたものである。

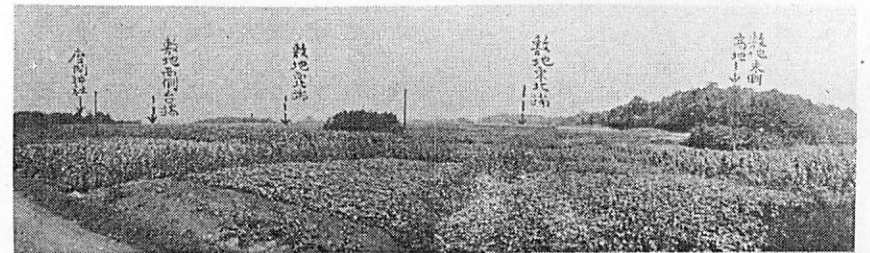
最後に栗原は無医村であつた。明治二十年の頃は、座間入谷の今の座間小学校の前の加藤という医師が、又は上今泉に桜井という漢方医があつて、これらに頼つていた。桜井医師は後の平塚の教育課長桜井稔氏の父君である。加藤医師は明治三十年頃まで開業していたが、後茅ヶ崎に移つてから、大塚に開業医が出来たが、名前は忘れた。

又、明治二十七、八年頃は、草柳に井上という医師があつて、村民はこれにかかつた。明治四十年の頃、大矢衛氏が医師試験に合格して、大塚が開業したが、数年ならずして死去して、再び無医村になつた。

間もなくその後へ菊田氏が開業した。従つて村民は富山や奈良の置き薬が救急の唯一の道であつた。



大矢助次郎著 栗原の歴史を語る
栗原(旧第2)小学校発行 文字は大矢氏自筆



陸軍士官学校移転とその周辺

小 俣 国 栄

現在のキャンブ座間は、旧陸軍士官学校の跡地である。東京の市ヶ谷台からこゝ座間に移されたのは昭和十二年で、同校の卒業式には必ず天皇陛下の行幸があつた。当時はラジオだけであつたが、天皇制下のため、ニュースでも最初に取扱われた。この頃から「座間」は日本の座間として知られたと云つてもよからう。

(一) 買収前の現地調査
陸軍士官学校の移転先については、当時座間を

含めて六ヶ所の候補地があげられていたと云う。

この座間移転については昭和十年秋某高級将校が、私服でこの地域を数回に亘つて視察したらしい。

たまたまある日、座間駅(現相武台前駅)からタクシーを利用して、この地を視察に来た私服の紳士(将校)があつた。この時の運転手は今亡き金子伍作氏であつた。この紳士は金子運転手に、附近の土地価格・農家の経済状態・買収の可否・住民感情等々さまざまき、帰京後これを貴重な資料として話が具体化し結局こゝ座間に決定したのではあるまいか。

この話は、終戦後ある機会に、後面の元高級将校から聞いた裏話であるが、これが移転の口火だとは誰も知るまい。

(二) いよいよ買収はじまる

今から四十年前、つまり昭和十一年の六月二十七日、座間の通称「上の原」一帯を、陸軍士官学校本科の移転用地として陸軍で買収

したい旨、第一師団経理部経理課から、公式に座間村役場へ突然の申入れがあつた。

当時の村長福垣許四郎氏は、早速買収予定地域の地主を集め、事の次第を詳細に説明すること数回その協力を要請された。

元来この地は、座間では一等地と云われた土地で、大部分桑畑であつた。当時の農家にとつて養蚕業は唯一の換金作業であつたため、この桑畑が無くなることは、誠に死活問題であつた。が、最終的には「お国のため」、と云うことで条件付きではあつたが買収に応じたのである。

条件としては一、晩秋蚕用の桑の収獲が終つてから工事に着手する。二、学校移転後は地元農家の子弟を最優先的に採用する。三、地元の生産品(野菜類など)及び商品を優先購入する。というようのものであつた。この条件は隣接地区の新磯村あたりでも同様であつたと云う。買収価格は、坪(三・三平方メートル)当たり式円五拾銭、反当(三百坪)七百五拾円であり、買収総面積約二十三万坪、

総額約六拾万円程であった。今日の値段に比べると、誠に隔世の感がある。

(三) 工事着工への準備

昭和十一年十月上旬、工事担当主任技師（第一師団経理部工務課）池田良恭、現場主任監督者小尾肇（陸軍技手）以下技術職員約三十名来村、高倉屋（たかくらや）旅館に宿泊、村役場の斡旋により稲垣寿春・小俣潔両氏の居宅二階を借り、宿舍に改造し、こゝに居住



工事の準備にかかった。工事請負業者は株式会社藤田組で、総額貳百七拾参万余円であった。

この頃、軍経理部から、土地の事情に詳しい地元の適任者をと云うことで、その筋の推薦のもとに十一年十月十八日附で経理部の一職員と

なつた。そんなわけで私は、いわば「現地雇備第一号」ということになつた。

(四) 工事はじまる

私は就職と同時に、土地測量の経験を有すると云うことから、土木班に配属された。工事の基本となる南北中心線の設定・基準点の標高測定・境界査定の杭打作業・主要建築物の位置設定等が主な仕事であつた。

一方請負業者は突貫工事で、事務所・宿舍を予定地に建設し、十月上旬バラック建築ながらも完成させ、職員全員を座間の借上宿舍から移転したのである。

(五) 困難だつた給水工事

工事中給水工事は、大きな難関に出会つた。最初の軍の計画では、校内に深井戸を掘り給水する予定で、敷地内座間分の東北山麓附近を適地と定め、深さ百メートルまで掘つたが必要水量を得ることが出来なかつた。仕方なく外部に水源を求めることとなり、あたりの水脈調査の末、現在の栗原水源地を候補地とし、試掘の結果、水量・水質共々上々と云う

ことで、こゝに決定した。しかし校舎より三キロ余りもあるため、校内への送水管敷設に要する諸費が予想外かゝることとなつたが、この面も認められ九月上旬完成した。尚送水管の太さで部内に意見が対立したが、結局三十センチ説が通つた。後日生徒が戦局拡大に激増されたが、水問題は起らずにすんだ。この三十センチ意見を通した一技手は、先見の明があつたのみならず、この意見を通すため実に職をかけてやつたのである。尚この上水道は、学校施設の膨張につれ、今迄の水源では、不足のため昭和十八年秋新しく芹沢地区に、第二の水源を求め、従来の施設と併用していた。終戦後駐留軍の膨大な使用量のため、第三の水源地を設け、交互にこの三ヶ所の井戸を利用し現在に至つてゐる。

(六) 第二の難工事大講堂建築

大講堂は、構内唯一の鉄骨鉄筋コンクリート造りで、建坪三五八坪（一、一八二平方メートル）と予定された。しかし試掘の結果は、地盤軟弱であると云うことである。今更建物

配置上位置変更は出来ない。そのためコンクリート製の杭（長さ十メートル）数十本を打ち込み基礎工事をすることになつた。先頃座間高校建設の際、校地が軟弱な地盤のためこのような杭打ちをやつたが、比較的容易にやつた。今日ではそうだが、あの頃は大変なことであつた。

このような中にも、十二月上旬には、大講堂は完成し、二十日の第五十期卒業式には、間に合つた。優等生の御前講演も行われた。現在は外部の一部を改造し、米軍が映画館として使用している。

(七) 技術の粹を集めての本部建築

学校本部の建築設計は、当時の陸軍建築基準による木造建築としては、最高のものと云つても過言でないと思ふ。

階上には校長・幹事ら学校幹部を、東端には便殿・貴賓室及予備室を備え、総資材は特別精選一級品をと云うことであつた。そんなわけで、板一枚と云えども経理部監督者の検査証印の無いものは使用させなかつた。各々

の職人も粒揃い・腕自慢のものが、精魂をこめた。こうして建物は、二十年九月美事に完成した。建坪三〇二、延五九五坪である。

さて、この士官学校の象徴とも云うべき建物は、終戦後、駐留軍使用中失火により階上部は殆んど焼け（昭和三十四年）、遂に取毀しの運命となり現在はその片影すら見ることは出来ない。

就職以来長野へ疎開する迄、この建物内で執務した一人として誠に思出はつきない。殊に卒業式前の便殿・貴賓室内外の精密点検・清掃補修等は質素にしつつも身の引きしまる思いであった。尙気品ある室内の模様や調度品等今も強く眼底に焼きついている。

(八) 地下道は特殊工事

相武台前駅より新戸に通ずる現在の地下道（トンネル）は次のような目的と方法で出来た。

相模原市新戸地区から座間駅（現相武台前駅）に出るには、陸士の敷地内を通らねばならない。地元の要望でもあり何とかせねばならぬ。

らない問題であった。しかし、当局は敷地内を地方道が横断することは、生徒の教育訓練上支障を来すとして地下道案を示し、地元の了解を得て工事に着手した。

幸い旧道の南側に、道路に平行して低地があった。工事中は湧水のため、側壁の一部が崩壊する等の事故があったが、比較的順調に作業が進み、現在の地下道は完成した。全長五五〇メートル、幅員五メートル余、側溝六〇センチ、高さ四メートル余、採光通気窓五、総鉄筋コンクリート造りで、路面は簡易舗装であった。尙この路面下一メートルのところには排水本管（内径一メートル）が埋められている。校内の雨水及下水の一部は、この本管に接続され、排水溝によつて新戸地区内鳩川に放流されている。

(九) 雄健（おたけび）神社と賜名記念碑

特殊建造物として、雄健神社と「相武台」の賜名記念碑をあげることが出来よう。

雄健神社は、大正五年九月陸軍士官学校の守護神として、市ヶ谷台に建てられたと云う。

祭神は天照大神・明治天皇・陸士出身戦没者の合祀とのことである。

座間への移転開始は、十三年三月で同年五月末に竣工した。総檜の神明造り、檜皮葺で広さ五平方メートルである。六月十日の深夜遷座祭が行われた。当夜は明治神宮高原権宮司以下神官多数、地元の神官も参列し、権宮司司祭のもとに、極めて厳肅に、御霊は奉遷された。

終戦後御霊は、学校の疎開先である長野県北佐久郡本牧村望月の大伴神社に合祀し、社殿は留守隊の手により焼き奉られた。現在残っているものは、参道と大鳥居だけである。大鳥居は、工事請負者藤田組の奉納によるものと云う。

○賜名記念碑

昭和十二年十二月二十日、第五十期生徒卒業式が、天皇陛下親臨のもとに、始めて座間の新校舎で行われた。当日、陛下はこの地を「相武台」とご命名になった。当局はこの地名を記念して、碑を建立することとなり、山

梨泉塩山の石材店に依頼して、校内に搬入、数名の石工による六ヶ月余の慎重な作業により、十五年八月正門内右側に完成した。

表の「相武台」の文字は、御命名書の文字を写真拡大して、石に刻んだもの。

又裏の碑文は、当時の陸軍大臣杉山元大將の直筆で、建碑の由来が記されている。除幕式は同年八月二十日であった。

さて、この記念碑は終戦と同時に、留守隊の手によつて附近に埋めたが、後駐留軍により復原された。

本村はこの最初の天皇行幸の日を卜して、従来の中門を座間町と昇格したのであった。

(十) 特殊構造の防空壕

戦禍の拡大につれ、どこの民家でも防空壕を作った。

陸士では、大講堂東側山林の中復に、特殊防空壕を構築万々に備えた。昭和十九年の初頭であった。

生徒の卒業式には殆んど慣例として天皇が

行幸されるので、当時の戦局の情勢から、陸下用防空壕の緊急設置の必要となり、東部軍經理部の直轄による極秘工事として、一部の限られた関係者以外の絶対出入を禁止して、密かに工事が行われた。当時営繕課の一員として工事中、再三に渉り、現場立入りを許されたので、記憶によつてその概要を記す。

先ず工事は山林の中復を掘削し、堅固な基礎工事を旋し、側壁は一〇耗鉄筋を十センチ間隔に縦横に組合わせ、厚さ二〇センチの二号コンクリートで固め、上部には亀甲型掩蓋と称して、東部軍經理部技術班が考案開発した厚さ約五〇センチの亀の甲型をした特殊コンクリート製の覆いが施された。当時千キロの直撃爆弾に対しても、充分堪え得ると云う堅固な構造で、その上に約一メートル程の覆土をなし、樹木を植えて外観は全く普通の山林同様の姿で現存している。

壕内は三部屋に仕切られ、出入口及各部屋の間仕切りは頑強な鉄製扉で区切られている。一部屋の広さは四畳半程度で、中央の部屋は

陛下の御座所となつてゐる。南側は宮内省側近者、北側は学校首脳部用となつてゐる。外部よりの出入口は南及び西北側の二ヶ所で、爆風除けの為、扉まで迷路の形となつてゐる。さて、電源は大講堂から地下配線によつて、照明及換気が出来るようになっていたが、停電を考慮し、大型乾電池による切替装置が、北側の室内に設けられた。

この乾電池使用の場合には照明のみで、換気装置は操作しない為、人力による足踏式換気扇装置が同じこの部屋の片隅に設置された。この装置の操作担当者は、営繕課主任の故真崎善三氏と定められていたが、もし事故ある時は交替要員となつていたので、操作修得の為三回程この装置を動かした経験を持つてゐる。

莫大な経費と労力を投じたこの防空壕も、正式には一回も使用することなく終戦となつたのである。

① 車寄築山松の記

昭和十四年秋頃、当時の学校幹事（副校長）

赤柴少将の命により、営繕課から横浜坂田商会对し、本館前にふさわしい松を物色するよう依頼した。同商会在関東一円をさがした末、群馬県前橋在の豪農一色某氏宅の離れ二階家の庭先に、美事を松のあるのを発見、陸士校本部前庭に植えると云うことで交渉の結果、同家の心良い承諾により移植することになった。坂田商会の慎重な作業により十五年春移植を完了した。

その後、学校では最も大切な樹木として、管理に意を注いだ。戦後暫く放置されていたが、二十六年頃から、軍の造園係によつて手入れされている。樹令二百年とか、良く繁つている。価格は謝礼として、金千円を同家に贈つただけである。この経費は将校集会所費から支出されたと云う。

② 忙しかつた在職八年

私は陸士新築第一期工事の完成する前、即ち昭和十二年七月一日附で、陸士事務職員として採用され（初任給四十二円）、經理部から学校側へ転勤、学校営繕課に配属となつた。

約一ヶ月間市ヶ谷に於て営繕事務を習得、翌八月より座間の工事現場に出張し将来の営繕業務に備えて、つぶさに工事の実情を把握した。これは後日のため、誠に有益なことであつた。

九月上旬には移転の為の先発要員となり、約一ヶ月にわたつて、多忙な日を送つた。

新校の調度品は総て新調されたので、業者による膨大な納入物品の搬入が、連日夜遅く迄行われ、学校側の受領者として、殆んど休む暇のない程の忙しい毎日の繰返しであつた。

特に九月二十日頃からは、各部各課の先発者が続々来校、移転の準備業務を開始したが殆んどのが、未知の施設に來た為、校内のようすは全く不案内であつた。「座間へ行つて解らないことがあつたら、営繕課の小俣に聞け」と云う指示を受けて來た職員が、多数いた程で、其の応待・連絡、更に保管物品の分配・受授業務等々、今當時を想い出して「全く良くやつたものだ」の一語につきる。

九月三十日、篠塚校長以下全職員、第五十

期生徒四ヶ中隊が市ヶ谷から歴史的な移転をした。移転以来終戦迄の八年間は、年々生徒数の増加に伴う諸施設増強のため、敷地の拡張が必要となり、北側新戸地区の拡張を始め、十五年秋には正門南側地区を、更に十八年には現在の緑ヶ丘地区の大部分を買収した。これに伴って諸工事も、十九年春頃迄毎年継続して行われ、建物三百数十棟をかぞえる膨大な施設となつた。併し二十年初頭より、空襲の被害を最小に喰止める為、建物の間引が始まり、大小相当数の建物が姿を消した。二十年六月下旬には、学校の疎開と云う重大局面にあり、特科生徒と一部の留守隊要員を残して、長野県北佐久郡本牧村望月を中心とした周辺十ヶ村に移転した。しかし約一ヶ月半後終戦となつてしまつたのである。

(十三) 心に残つた卒業式の緊張

天皇の行幸を仰いで行われる行事中、陸士の卒業式は重要な行事の一つであつたので、学校にとつてもこの卒業式を無事に終らせるのは大変なことであつた。その為、約一ヶ月

前から学校の総力を挙げて準備が始められるのである。

先づ学校幹事を委員長とする首脳陣によつて、準備委員会が設けられ、各々担当業務の責任者が任命される。各責任者は業務の細部計画を立案、委員長の承認をへて準備活動を行ふ。とに角、この卒業式に関する限り、理由の如何を問わず「間違ひ」とか「手落ち」とかという事は絶体に許されないので、一つ間違れば左遷どころか首が飛ぶと云う時代であつた。そんなわけで、我々下級職員でさえ、責任の重大さに、身の引き締まる思いをしたものである。卒業式二日前には、当日通りの計画に従つて予行演習が行われて、万端の準備が完了するのである。

ここに特に印象の深かつた第五十期生徒の座間での第一回卒業式について記してみる。

陛下は当日、陸軍御軍装であつたが、参列の文武百官は全員総て正装を着用した。陸軍が公式に正装を着用したのは、恐らくこれが最後であつたであろう。

相模原演習場の御野立所に於ける諸兵連合演習の天覧、練兵場に於ての愛馬「白雪」での御閱兵、力強い生徒の分列行進、更に校庭での卒業証書授与式等、ま近で見えた四十年前の光景が、まるで昨日のことのように脳裡に浮んで感無量になるのも、年令のためか。

余談ではあるが、この卒業式の為に、当時地方では、ほんの一部の人以外は作らなかつたモーニングを、月給の一ヶ月半以上も専発して、七十何円かで新調したことも、今ではなつかしい思い出である。

十四 終戦後の旧陸士―現座間キャンプ

昭和二十年八月十五日の終戦時の陸士の状況については、長野の疎開先きにいたため、全く不明である。九月五日米軍キング少将による学校の接収も、丁度復員婦郷三日目のことであつたため、全く関知しなかつた。只当時の関係者の話で「極めて平穩に、紳士的に行われた」と聞いているだけである。

米陸軍は接収後、部隊を駐留させるための受け入れ準備を先発者によつて開始した。

この準備作業は、終戦まで学校に勤務していた内部事情に詳しい者をと云うことであつた。そんなわけで、座間警部補派出所を通して、いわゆる占領軍命令として「学校当時の管轄関係者を緊急に集め出頭させよ」との通告によつて、二十年九月十八日午前八時に、十八名が表門前に集合し、先発隊専属二世の外人通訳の案内で、日本人として始めて校内に入つたわけである。

管轄担当の米軍責任者(大尉)による個別面接で、前歴の職種に分けられ、夫々専門の技術下士官(軍曹)に配属され、直ちにその指揮のもとに、差し当つて必要な建物から、順次復旧作業に取りかゝつた。

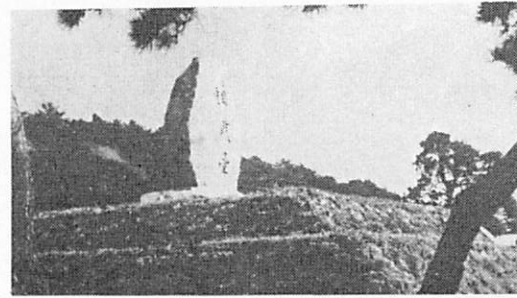
十日程で必要な建物と付属の施設を使用出来るよう整備復旧し、十月上旬第四補充部隊が進駐したのである。

人種は勿論のこと、言語・風俗・習慣等総て異なる外国軍隊に、敗戦国民とし始めて雇われた。(それも半強制的に)。

最初の頃は、毎日が恐怖と不安の連続であ

つたが、程なくそうした不安や恐怖は、単なる杞憂に過ぎないことが解り、緊張の中にも可成り安堵した気持で働くことが出来るようになった。米軍幹部は、先発要員に、人格・教養・識見共に勝れた将校・下士官を指名したものと思われる。

長かつた駐留軍の勤務中には、いろいろな



相武台記念碑

障碍や苦い経験、人に言われぬ苦勞もあつて、決して平坦な道ばかりではなかつた。ほんとうの民主主義を身につけた多数の米軍監督者の許で、誠意を持つて精一杯働くことが出来たのは誠に幸せなことであつた。 経理部への就職

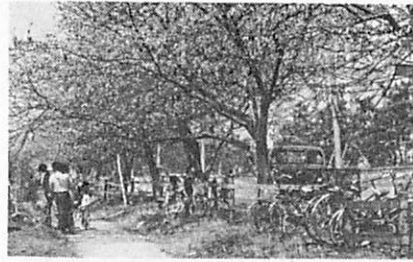
以来、四十年近い勤務を定年退職と云う人生の一つの区切りによつて無事に終つたことを自分なりに心から満足している。

畑灌桜の由来

角田 俊久

年々桜の季節ともなれば、市内東原小学校東端南北に通ずる桜並木が、一せいに開花し市民を喜ばせている。桜の本数は約百四十本延長一キロ余に及び、最近では花見客でかなりの人出でにぎわうとか。

この辺一帯の地域は、第二次大戦後相模川上流にある相模湖から導水し、畑に水をかけ農作物に必要な水分を与え、増収をねらつた地域である。世の変転につれ、現在ではすっかり街並みと変わり、今では多額の費用を投じて、畑に水をかけることは採算のとれぬことになつた。この桜並木は灌漑水路の幹線跡地に植えた桜のため、畑灌桜と云う。この苗木



畑灌桜の並木

はひばりが丘西山茂氏より芹沢地区以南の生産組合員百六十七名のものが、一本宛買い受け、四月八日曇降る中を栽植したものと云う。元来相模原台地一帯は、いわゆる火山灰土で、保水力に乏しく、為にしばしば旱害にあつた。農民が耕作に不利に地下水までは二〇メートル余もあり、井戸掘りも困難でこの地で生活するのは容易なことではなかつた。殊に春先きは文字通りの黄塵万丈であつた。

ところで、この地に田を作ろうと云う計画は、明治初年既に考えられていたと云う。殊に榎本武揚らは、明治十六年このための趣意書さえ出していると云うことであるが、実現に到らなかつたと云う。

大正年代、時の有吉知事は、一万余円の調査費を計上し、開田に意欲をみせたが、これ又実現せず終つた。理由は、相模川は水位が低く、この台地に導水するには余程上流よりせねばならないため、莫大な費用がかゝり、採算が合わないことであつた。この時の対象面積は四、四〇〇町歩、毎秒八八〇立方メートルを導水する、費用七〇六万円であつた。

さて、其の後も開田の熱意は強く、昭和八年又々持ち上つた。これは養蚕業の不況によるものである。このため県は試みに三町九反の試験田を相原（現相模原市）地区に設けたが、成績は上々であつた。これに勢を得て翌九年には、開田期成同盟が結成され、胎中代議士や岩本・小林・高下ら諸議の面々が顧問格となり、関係町村長の音頭のもとに、運動が展開された。

しかし、この頃すでにわが国は大陸に出兵、戦火は日に日に拡大されていた。戦争の拡大に伴い、工業用水や電力が不足するようにな

つた。このため相模川は開田の外、こうした面への利用も考えねばならず、開田対象は二、一五〇町歩（この中座間地内は一六六町歩）とされた。

こうした矢先、更に開田計画に水をさしたのが、昭和十一年六月に始まった陸軍士官学校の相模原台地移転問題である。軍側の要求面積は七四〇町歩（座間は四〇町歩たらず）という膨大なものであった。軍側は次々施設を相模原地内に設けた。このため地価は高騰し、開田というようなことは自然薄らいで行つた。

昭和十三年一月時の半井知事は、このような情勢から、相模川河水統制の全貌を議案に提案した。総工費二、六八〇万円（当時の県決算額は八九四万円）で、起債二、五六六万円、四ヶ年計画というものであった。しかし、長びいた戦争と、戦争によるインフレのため、物価は高騰、工事は変更次第々々変更を余儀なくされ、昭和二〇年六月には、一旦工事は中止のやむなきに到つた。

昭和二一年七月、戦後の混乱の中にも、事業は再開された。こんどは開田でなく畑地に水をかける（畑地灌漑）という方法の下に、昭和二四年より二、七〇〇町歩にわたり、いよいよ実施されることになった。これ実にわが国に於ける歴史的な大事業で、自然改造とも云うべきか。

水かけの方法は、試験の結果五日毎に三〇〜四〇ミリしめらせることが良いとされたので、長さ二〇〜二五メートルの畦間に毎秒二リットル程度の水を流せば事が足りた。この長さの畦の末端までに水が行きつく時間は二〜三分程度で、三畦間同時に通水すれば、一反歩（一〇アール）約一〜一・五時間でしめりが終つた。

県の試験地の報告では、陸稻の場合灌水地の収量は、無灌水地の三倍で、反当り二石四斗（四三・二リットル）にも及んだと云う。急激な相模台地区の都市化の裏には、このように自然へ排戦した農民の苦闘がひそんでいるが、咲き誇る桜は、この事実をどう見て

いるだろう。

昭和三十七年頃には、相模野一帯の台地もすっかり宅地化して、も早無用の長物となつてしまつたが、戦中の食糧難の経験から、終戦数年後このような歴史的行事のあつたことは、当然とは云え、尊い人間の試練と云うべきではあるまいか。（前掲写真に畑地灌漑用水堀の傍らに植えられた桜並木。用水路は既に埋められている）

六法言葉

飯島忠雄

一般の人達が毎日使っている通俗語の中にはその土地独特の方言があつて訛りがある。座間市の中には特徴のある言葉は見出せないが近隣の町の部落には昔から言い慣わした言葉が未だ残っている処もある。綾瀬町深谷の年寄は夕方から夜にかけて他家に行くとき「お晩になりました」、又「おしまいでございま

すよお」、と声を掛ける、「今日一日御無事にお過ごしになつてようございましたね」、と一日を平和にくらした事を喜び合うあいさつである。相模原市新戸には、大正から昭和初期にかけて、「けえねえか」という言葉があつた。これは、私に呉れないか、という言葉であつて、以前に須賀南湖の引売の魚屋が使つていたものだが、新戸に定着したものである。座間の年寄もそうだったが、各地の年寄が祝儀や病氣見舞、法要などに志を届けに行くときと必ずと言っていいくらいに、「ごみよんなさいませんでしよう」、と言つたものだ、この言葉の意味は何んだらうかとさんさん考えたが思い当りがなかつたが、最近江戸期の書簡を見て、成程と感付いて、「ごみよんなさいませんでしよう」の内容が判つた。

それは、相手の好意に対して、無礼にならぬ様にやわらかくおことわりをするための言葉である。文字にすると、御無用になさる可く候、又御芳志かたじけなく候へ共、御無用なさる可く御願申し上げ候。等を書簡に書き

会話では、御心配なさらなくてもよかつたに、と一応相手の志を受ける前の儀礼的な言葉で遠慮する控へのあいさつが永い間に田舎の年寄だけが使う言葉として変形したものである。我々が平常使っている会話の中に、男だけが使う言葉が可成り有る、その言葉は関東独特のベエベエ言葉であつて、日本の標準語とは別個のものである。この実例は次の通りである。点は冗語とすべき言葉。

つん出せ（出せ）。ぶんなぐる（なぐる）。
つんのめる（のめる）。ふんだくる（うばう）。
はらんばい（腹這い）。ぶったたく（打叩く）。
ひんまげる（まげる）。かつけねえ
（かたじけない）。この変な言葉の起りは、元祿年間に江戸市中を横行した旗本の乱暴者の白柄組、神祇組等が派手な服装で日中大勢連れ立って市中を飲み歩いて武士や町人の見境なくけんかを売って痛快がった不良武士が考へ出した言葉で六法言葉といつた。六法言葉を沢山取入れて作つたのが歌舞伎の曾我の対面の場である。この外六法言葉を探せば沢山

あるが、この言葉が江戸市民に移つて、やくざや仕事師、職人、その他あらゆる職人が是を真似たので、六法言葉がしまいに通俗語となつて、この言い方を「伝法」といふ使ひ人間共を伝法肌と言つた。ていねいなやさしい言葉を使う職人をにやけた野郎だといふ眼で見られたりしたもので、ボンボン威勢よく早言葉で物を言う職人が町家から喜ばれて江ッ子の荒言葉が出来た。

下卑な下町野郎の伝法言葉の反対に屋敷町では武士や富豪の町人、文化人、学者、等は上品で礼節を重んじて生活をしたので、江戸の市民の中に上品な言葉と下卑な言葉とが入り交つて使ひ分けられていた。くるわのおいらんが使つた「さと言葉」は現代に残つていないが、「主さん」のさと言葉は流行歌や都々逸、川柳等に引用されたが、大正季以後絶えたとある。最近まで使われていたが、いまではあまり使われない女子だけが使う「ザーマス」言葉の起りは中流あるいは上流社会の婦人が使う上品な言葉だと思ひ込んで

いる御婦人があるでしょうが、これを使つた女子の階級は下町の芸人の女房や娘と芸者、茶汲女、酌婦等の下賤な女達が使ひ出したもので明治頃から始まつたとゲテ本に出ている。だから、「ザーマス」を使う御婦人は上流の奥方ではなく、お茶屋の女か酌婦同級の者と思召せ。今の人も使つてる男だけの悪たれ文句に、ベランメー、といふのがある。この起りは、江戸の中期に浅草観音の境内に黒人の見世物がかゝつた、この黒人のことをベラボーと言つた。それらしい江戸の庶民の間に人を馬鹿にする方言として、ベラボーめ（奴）といふことが流行しこれが転化してベランメーとなつたという。これは武江年表という本に出ているのである。出所不明な言葉にオチヤッピー、チャンチャラオカシイなんてあるが、こんな言葉も江戸の下町言葉であろうが、探し出したらきりがないのでこのへんで終ろう。

生駒翁芸談

飯島忠雄



豊竹生駒大夫
(昭和47年80才)

座間周辺の村々に義太夫が語り始められたのは、江戸末期からである。百年以上も語られて居る内には、巧者の者は師匠になつて好きな人達に教え継がれて、現代まで民衆の娯

座間周辺の村々に義太夫が語り始められたのは、江戸末期からである。百年以上も語られていた内には、巧者の者は師匠になつて、好きな人達に教え継がれて、現代まで民衆の娯楽として続けられて来た。

この義太夫を習つた人達のなかには、師匠を凌ぐ上手な者や、名人だ、と言われた人もあつたに違いないが、それは極く少いもので、大方の者は唯好きで語つただけで、深い研究もせずに楽しむだけのお道楽で終るのが常である。自分の好む道に生涯を懸けて修業錬磨を重ねて、自分のなし得る極点を見詰めるまで義太夫に挑んだ人はそうザラに有るはずがない。座間近辺の語り手の中で、唯一人義太夫に一生を賭けた生駒老人の義太夫修業の足跡を記述して置き度い。生駒老人は、新磯村新戸の松下という屋号の酒造家佐藤豊吉の二男に、明治二十四年に生れた。名は佐藤正二、佐藤さんは家業を手伝うかたわらに二十才頃、友達六人が義太夫を習おうと、白髯神社の付近で義太夫を教えて居た長谷川治三郎という

あつたり、義太夫会があつて、その中の人達は正二さんのお得意であつて、度々稽古場に酒の配達などして義太夫会の人達と顔なじみが深くなつていた。或る時酒を稽古場に届けた時居合せた者が、佐藤さんは義太夫が好きかと聞いた。佐藤さんが好きだと答へると、義太夫をやつたかと言うので、村に居た時十種香をさらつたと言うと、じゃ上つて語つてみろといわれたので、いきなり高座に上つて十種香を語ると、並び居る連中が巧いと褒めてくれた。師匠の老人が、佐藤さんに、お前は筋がいいから義太夫会に入れとすゝめられたのが佐藤さんが本格に義太夫を修業する動機で平塚の稽古場から始められたのである。その師匠は鶴沢平吉という師匠で、文楽から出たと言われる生駒太夫の二代目を襲名している義太夫界の名人であつた。平吉師匠は佐藤さんの十種香一段を開いて、佐藤さんが内蔵する素質の並々ならぬことを見抜いたのであつた。佐藤さんが平吉師匠について師事したのは、三十六才頃であつた。(野口寿長氏

爺さんについて稽古をした。佐藤さんが始めて義太夫を習つたのは十種香であつた。

百回くらいさらつた二十三才の冬、榎左エ門という百姓家の広い座敷を借りて稽古仕舞をした。佐藤さんが義太夫を始めた第一歩である。二十六才の時、正二さんは父から離れて分家し独立することになつた、シンさんという娘と結婚して、家業の酒屋を開業したのである。店は、厚木から平塚の東海道に出る手前で、厚木寄りの右側に店を構えた、店の間口は狭かつたが、奥行が深く、裏手は酒樽を置く倉庫であつた。自家醸造の酒を、東海道筋に売り広めようとの父豊吉さんの商略であつたらしい。店には大きな火鉢を置き、暖場には、女房姿の初々しいシンさんが、あいそよく客を迎えて居た。店が盛るので女房一人では店の切り廻しが出来なくなつたので、番頭を雇つてもまだ手不足なほど繁昌した。こうして正二さんは、商売一途に働き続けたので、大部商売経営にゆとりが出来る様になつた。平塚には、前鳥座という人形芝居の座が

談)それ以後佐藤さんは義太夫に執念の火を燃やし始めたのである。稽古場だけの稽古では物足らなくなつた師匠と佐藤さんは師匠の自宅に通つて単独の稽古をやるようになった。稽古を可成り積んでからの話がある。師匠の宅で稽古をしている時、齋屋を語ると、きまつて炊事場に居る師匠のおかみさんがワツと泣き出すので、師匠が三味線を止めて「何を泣くんだ。」と叱り付けるとおかみさんが炊事から出て来て「佐藤さんの義太夫を聞き乍ら飯をたいて居ると、悲しくなつて泣けてしまふのです、泣くまいと思つても我慢出来なくなつて泣けてしまふんです。」と言つた。師匠は稽古場で佐藤さんはおれの女房ばかり泣かせる、と言つて笑つたという。

すでに其の頃には佐藤さんのウデは相当な域に達して居たものである。今度は佐藤さんの座敷でやろうというので、佐藤さんの座敷で稽古すると、酒を買いに来た客が、これはいいというので、座敷に上り込んでしまふので、座敷はいつも大入満員の盛況。そうし

て稽古を重ねていたのが何年たつたかわからないが、師匠は佐藤さんに自分の芸は教え尽したというので、平吉師匠の大先輩である坂本飛鶴という大名人に推挙して佐藤さんを弟子入させた。以来佐藤さんは飛鶴について教を受けた。又三味線の名手豊沢松太郎師匠について浄瑠璃と三味線の呼吸についての教を受けるというように名人大家に礼をつくしてその急所秘伝を授かったのである。修業の段階は、専門家も及ばぬ微妙な細かい所まで知りつくして、円熟期に入ろうとする時に、大阪文楽の東京出張興行があつた。その興行中に、坂本飛鶴、豊沢松太郎両師の計らいで、出物の内詣屋の一段を佐藤さんに語らせて見ようというので、桐竹紋十郎師匠に頼み込まれたのであつた。桐竹師匠は二人の頼みを入れて佐藤さんに詣屋を語ることを承諾された。その知らせを聞いた佐藤さんの驚きは大変なもので、命を懸ける覚悟で文楽の詣屋をつとめた。詣屋の語りの中に、東京の義太夫と大阪の文楽人形に僅か乍ら違うものを見出した

佐藤さんは、桐竹師匠が大阪に引き揚げる時、師匠に付き添って文楽の人形浄瑠璃と東京義太夫の相違点に付いて細々と教えてもらい大阪人形浄瑠璃の秘伝を学んだという。桐竹師匠は佐藤さんが詣屋の段で初めて人形の浄瑠璃を語り乍ら大阪と東京の小さな違いを発見して、わざわざ大阪に来て教えを求めた佐藤さんの熱意と芸に身を打ち込んだ態度に深く感心されて、それ以来桐竹師匠と佐藤さんの親交は義太夫を通じてつゞいたのである。佐藤さんの義太夫研究の意欲は益々つのるばかりで、東京の先輩のすゝめで、当時義太夫界の大御所と言われた都太夫師匠にも門人の礼を以て入門して何年間か教を受けた。佐藤さんくらしいの語り手になると、稽古場に行つて、一段語りをするのでなく、芸題の中のむずかしい箇所を要点だけを教えてもらい総ざらいを何回か語つて師匠の急所だけを習得すればそれで目的は達せられるのであるが、市中の義太夫好きの稽古とは全々違つた教授の仕方、名人同志の以心伝心という古語にある

通り凡俗な者にはうかがい知れない秘伝の引取りであつた。佐藤さんに名人からコツを教わるにはどんな風に教わつたのかと、聞いたことがあつた。佐藤さんの言うには、師匠は、ここはこう声を落とす、ここは腹で語つて声呑み込めばいゝとかと言うだけのことで、急所を二三回語つて聞かせてくれるだけであつた。あとは自分で独習して教わつたコツを覚えることしかないのが普通で、同じことを二度聞き糺すことはしないし、二度も三度も聞こうとすれば取合つてくれなかつた、という。人形の床浄瑠璃と歌舞伎の床浄瑠璃の違うことに気付いて、歌舞伎座の太夫の綱太夫について歌舞伎の床浄瑠璃を学んだ。綱太夫は、歌舞伎座で会いましたよというので、歌舞伎座で詣屋を聞いた。それから綱太夫に会つて、義太夫との問合ひの取り方についての秘訣を教えてもらったという。佐藤さんは、名人から名人へと思つた存分修業を積んで、都太夫の膝元の東京で、円熟したのをころがして居た矢先に佐藤さんに大きな事件がのしかつ

て来た。それは最初の師匠の生駒太夫二代目から三代生駒太夫を都太夫師匠がつくことになつて、その披露が行われた。それまでは佐藤さんには、何の関係もないのであるが、生駒太夫の襲名後に、湘南の平塚の連中で平吉師匠の門人から、師匠の相模太夫を佐藤さんに継がせようというので話がまとまつて、二代目相模太夫を佐藤さんが継いだのである。その相模太夫襲名が問題になつた。というのは、鶴沢平吉さんは東京太夫の名代の太夫であることを門人達は知り乍ら、平吉師匠の同僚や先輩に伝達なしに佐藤に渡すとは何事だ。佐藤は都太夫師匠や飛鶴、松太郎等の大先輩の息のかゝつた佐藤だけに、湘南地区だけで取るのは、東京の大師匠を無視した行為だと苦情が出たのである。此の件は誰が出て口をきいても一向に納まらなかつた。それから間もなく平吉師匠は他界されたのであつた。佐藤さんにふりかゝつた事件だけに、東京にも出られず何年かは閉門同様な状態で悶々として居た。都太夫の御息で歌舞伎の評論家

の安藤鶴夫先生がこの情況を見て調停に乗り出されたのであった。安藤先生が八方説得された結果、佐藤一身に東京の義太夫界の關係の糸が搦んでいたのであるが、元を言えば湘南地区の連中に軽率な所は有るが、鶴沢師自身は佐藤さんに自分の名跡を譲ったのに対して文句はない、又鶴沢師匠からうちのおやじが生駒太夫の譲り受けをした關係上悶着を深くすると、八方面汚しになるので、わしに免じてお任せ載きたいと頭を下げて言われると、同門同志のいざこざになり兼ねないので、納まる条件として生駒太夫を佐藤さんに譲ることとの結論を出されたのを呑み込んで双方が諒解出来たといわれている。昭和二十六年に都太夫から佐藤さんに次の様な文面の譲状が贈られた。

記

五代目豊竹生駒太夫

右御讓申上候也

昭和二十六年三月十二日

竹本都太夫

佐藤正二殿

この譲状は佐藤さんが今も肌離さず秘蔵しいられる佐藤さんの芸歴を語る唯一の文献であつて、終生忘れられない義太夫への熱心な火を燃やした記念である。これまでに立身する蔭には、妻のシンさんに一切の商売の責任を負わせて、芸に打ち込んだのだが、酒屋の店を維持することは出来ぬ程の借財が積もつた、生駒太夫という大きな太夫名を継いだ佐藤さんの技倆は、その道の先輩は認めてはいても、芸の修業にいやした借財までは誰も関与しなかつた。自業自得と自分で処理する以外はなく、開業二十年たらずで遂に店をたんで借財の仕末をした。無一物になつた佐藤さんは妻と満洲に高飛しようとして決意して友人に心中を明かした処、友人達は佐藤さんの満洲行を押し止めたのである。芸界では功をなしとげたが、生活の基礎を失つた佐藤さんの失意は深かつた。氣を取り直した佐藤さんは、シンさんと連れ立って、日本の各地に残る歌舞伎や義太夫にある伝承の跡蹟を探訪す

る旅に出たのである。昔の芸人が師匠から破門されたり、何かの事情があつて、稼ぎ場を去つて地方に遠ざかることを都落ちと言つた。その芸人は再び元に戻ることはなく、他国の地で生活した。より所のない者は、同業から同業者への一宿一飯の慈悲を求めてさすらいの旅をつゞけて、見知らぬ人の世話になつて、異郷の里に相い果てた。昔の人が言つた「西行」の旅である。佐藤さんは、北は那須野ヶ原から、義経のゆかりの古蹟のある能登、加賀を巡り、南は壇ノ浦・屋島等も見てまわつた。行く先の義太夫の稽古場や師匠に取り入つて、義太夫の興行をしてもらつたりして、旅費をかせいだという。このドン底の彷徨は一、二年だつたらしい。そして東京に戻り、知人の働きで東京市内に古い料理屋の売屋を求めて、料理店を始めたが、二、三年の内に義太夫連中の巢となつて経営不能となり人手に渡して元のホーロクとなつた。ホーロクと云うのは、煎鍋のこと、豆を煎つて居る内は、カラカラと賑やかな音がするが、豆が煎

れると鍋は空っぽになるのである。この言葉は人が貧乏してしんしょう片付けをした状態の代名詞である。佐藤さんに手引する者があつて、平塚の八幡通りにさゝやかな酒店を開業した。平塚に住みなれてから二十余年、義太夫にこり固まつて東京に出て、又平塚の古巢に舞い戻つたのである。土地の人達は佐藤さんの事業失敗のことは言わなかつた。むしろ義太夫の名人になつて平塚に戻つた事を喜ぶ人達が多かつた、店は以前の店の様に繁昌した。これは佐藤さんの商法上手でなく、佐藤さんの芸で佐藤さんを助けて盛つたのだから。佐藤さんはこの時は六十才くらいであつた。商売の忙しい年末の配達には、野口寿長さんや三橋駒吉さんなどよく配りの配達を手伝つたという。(寿長氏談)再び佐藤さんは甦がえつたのである、この盛んな時が佐藤生駒の全盛時代であつて、人間運が向いた時には、誰にでも浮沈の運命に見舞れるものである。その頃ラジオ放送局では、全国向けの義太夫放送を計画して居り、義太夫の名手の内

から幾人かを選抜して放送しようというのであった。審査員は義太夫界では坂本飛鶴、竹本都太夫、評論家の安藤鶴夫、学者の徳富蘇峯、文学者の久保田万太郎という各界の第一人者の顔ぶれであった。選考の方法は、出演者はくじ引きで順を決めた、御簾を垂れたまゝで演者は義太夫を語り審査員は座席できくのであつて、審査員は何番の芸題の一、二を決めた、生駒太夫も選考されて第一番の審査の時は弁慶上使を語つて失格、第二回の審査の時には脂屋を語つて一等に入選した。以後三回ラジオ放送に出演して一躍義太夫に名を揚げたのであるから平塚の連中は義太夫の話になると生駒太夫の話に花が咲いた。当時東海道筋には天下の名士の別荘が沢山あつて、生駒さんのお得意の中に別荘のお客さんが沢山あつて、年中酒の御用を承つていた。その中に、大実業家として知られた故岩崎小弥太さんの令息の別荘があつて、常に酒の御用を達していた。或る時、朝つばら表に二台の人力車が来て、車夫が一通の手紙を佐藤さんに

た。生駒の義太夫をたゝえて呉れる名士の中に、文豪島崎藤村先生がある。この話も二回目に平塚に店を構えてからの話である。藤村先生は大磯に住んで居られた。平塚に何かの用事で来られて、佐藤さんに会いたいと料亭からの電話であつた。丁度佐藤さんが居たので、早速その料亭に伺うと、藤村先生は酒を佐藤さんと汲み交し乍ら、佐藤さんの芸に対する熱烈な研究と完成した芸域を大変褒めてくれた末に、文士として現在になるまでの苦心と清貧に耐えて支へたドン底生活の思い出話などされた。佐藤さんも、家業を捨て、義太夫に走り、貧困と闘い乍ら、義太夫の芸の奥までを探り当てた話を交した。藤村先生と初対面でないながら、お互に貧苦をなめた同志であつたので、急に永年の知己の様な親味が湧いて夕暮までも話が尽きなかつた、以来藤村先生から、何度も激励の書信が佐藤さんに寄せられたのであつた。此の平塚八幡通りの酒屋の時代が佐藤さんや妻のシンさんに取つて、一番平和な時でもあつた。けれども此の

渡した。佐藤さんが見ると岩崎さんの手紙で、二台の人力車を差し向けました。御多忙中で御迷惑でしょうが太夫の義太夫を一段きゝたので御足労願ひ度いという文面であつたので、生駒さんは、車夫をつつ返すのも失礼と急いで三味線弾きに來てもらつて、岩崎邸に向いた。御子息は非常に喜ばれて、早速座敷に高座を拵へて弁慶上使を語つた。岩崎さんは今一段と所望された時に女中召使まで岩崎家の者全員集めて、私だけ生駒師匠の義太夫を聞くのは勿体ないから皆の者も一諸に聞きなさいと言われた時には、生駒さんは、岩崎さんまでわたしの義太夫を知つて下さるのは有難いと涙が出る程の感激を覚えて、酒屋を精一杯語ると、おそのゝくどきで、女中や奥様までワツと泣き出したので、語つていらわたしの方が驚いた、という思い出ばなしがある。この外別荘の上流人で三井家の大番頭や、天皇皇族専門の写真家、某政治家の妾等からも招かれて義太夫を語らせられたが、皆生駒さんの芸に惚れ込んだ名士の好みであつ

幸せはそう永く続かなかつた。世は大東亜戦争に入り経済統制や食糧事情の悪化で生活は極度に制限されていたので酒屋も嗜好品だけに制限を受けていたので、生活は苦しくなつた。妻のシンさんは病没した。五人の子供を残して、生駒さんは義太夫どころか子供の教育やら家計やらで、好きな義太夫などやる暇はなくなつてしまつたのであつた。そして昭和十七年八月一日の夜半に、B二九の空襲を受けて、店は全焼した。この災害で生駒さんは店の再建を考へる余地もなく、生地新戸に引き揚げたのであつた。生駒さんに一生ついてまわつたのは、商売の酒と義太夫の酒屋である。然も数さらつた芸題の中で酒屋の語りには得意のものであつただけに酒とは深い因縁に結ばれているのが面白い対照である。生駒さんは今年八十五才、生駒さんから義太夫を抜き去つたら唯の凡人である。今は過去のこととも、義太夫の事も一さい脳裡から抜け去つてしまつて、自宅の一室に老骨を横たへて日々を暮すだけで、自身の業績の一部さえ記憶

に止めて居ないのである。空蟬の様に室にしがみ付いて居るだけであつて、淋しい姿である。私が生駒さんの芸歴を聞き始めてから五年たつて居るが、話の内容に順序も年代も一切不明で、どの話が何才くらいの時か、壮年時代と老成期との仕別さえ聞き取れないので聞いたまゝを雑然と手記したに過ぎないが、異常までに義太夫を追究した過去の歴史を持つて居乍ら、老境に入るところまで忘れられるものかと思える程生駒老人の心境は空虚そのものである。唯残る一片の讓状の中に、血の玉切る修業の跡を想像するのみであつて、生駒太夫の芸域の非凡さを知る六十代の録音が数点残されていて、この録音から出る語り口の精妙さが生駒太夫の芸の深さをしのぶ遺品である。終りに、生駒太夫の名跡を継ぐ者が、生駒太夫の存命中に出て、生駒太夫を安心させる事を実現させたいのである。此の稿を綴るために故荒井政五郎、三橋邦太郎の二氏と寿会の野口寿長さんに生駒翁の芸歴の御教示を得たことに感謝致します。

(昭和五十一年五月二十五日記)

座間動物誌 (2)

カラスの「勘んちゃん」

白井光信

はじめに

私は坊さんだ。正しくは入谷は鈴鹿の座間山心岩禅寺の住職です。正徳二年建立の山門それに放光殿(本堂)と庫裡と鐘樓。うしろほ相模川の第一段丘で大山丹沢を一望するこの出来る心岩寺七木(ヒチボク)の繁茂する屋敷林に包まれ泉は滾滾と湧き出し、大池が二面あり、畑と云えば雑草雑木でいっぱい。この寺の特徴は全国でも珍らしいねんがらねんじゅう雨戸も障子も開けつばなし。従つて風の流通も極めて良く吹きつ放し。たまにはお金の入ることもあるがこれも又出つ放してお金溜る所が更にならない。こんな環境と背景の中に「勘んちゃん」との交友関係が生まれ、大自然の中に殆んど放し飼いに近く展開した二十年近くの友情実話である。

初代「勘んちゃん」 第一話



僕んちの「勘んちゃん」が生まれたのは今から二十一年位前の五月のはじめの或る日だった。屋敷林の若緑が燃える「上(うえ)の山」

の樹高二十メートル位はあるであろう檜の大木のテッペン近くに造られた巢から転び落ちたのだつた。運よく三男坊に捨われて家族の一員として僕や家族の手によつて育てられた。

生まれて三、四日は経つていたか、本当にまっ赤な赤ん坊だった。嘴だけはデカかった。生きてゐるんだ。それに余りにも愛らしいので世話せずに居られない衝動にかられて早速

大きな果物籠に藁や新聞紙を敷いてベットにした。やや長い間、羽根の無い翼をバタバタさせてカアカアと鳴き通し、それに御飯やゴマメの細かくさいたもの等を箸の先で三度三度養つたのである。五月の事で鮎の解禁には間がある。三男坊は密漁が大好きで、相模川磯部の頭首工へ行つて掬つて来ては与えてくれた。カアカアググと「勘んちゃん」の喜び様つたらなかつた。密漁で育つたと云つても差支えない。蝶よ花よと家中で世話したのだつた。

お蔭様でスクスク成長して一ヶ月許りで、カラスの形態を整えて来た。ピチピチジュクジュクと白くて黒い糞の垂れ流し。そんなことは頓着なし、家中で蝶よ花よと可愛がった。

第二話

其の頃雨は漏れないが大きい鶏舎の廃屋があつたからここを「勘んちゃん」の住居に当て解放的に自由に遊ばせた。そして人なつこい「勘んちゃん」は家族の一員としてピョコピョコピョンピョン座敷にやつて来てバタバ

タ愛敬を振り撒いて居た。何しろ珍しいのと愛らしいので家族の評判も良く「勘ヨ勘ヨ」と愛称してたのだった。

三、四ヶ月経過したらそれこそ一人前の美少女になつた。御存知の通り黒いが横から見ると紫がかつたお齒黒色でピカピカ光つてそれはそれは美しいこと、僕は見直しちゃつた。鼻の穴は大きく二、三枚の鼻毛に当たる小羽根で覆い普通の人にはわからない。僕はよくこの羽根を明けて見た。嘴は鋭くて剃刀の如く素晴らしく良く切れて太い。「ハシブトガラス」だ。

因(ちなみ)に日本には「ハシブト」「ハシボソ」「カワガラス」の三種が居る。座間地方には「ハシブト」、「ハシボソ」の二種が居て毎日賑やかなこと。時に大群をなして住む。「カワガラス」は溪間に沿つて崖辺岩上に棲息し潜水が巧みで魚を採る小型ガラスである。ピッピッと鳴く。高尾山の浅川でよく見かける。

第三話

りさせているだけ。今でも時々この点検はやる。これが娘さんだったら、一寸来い、逮捕狼褻罪と話題を撒くこと必然だ。そんな工合でとに角僕んちの「勘ンちゃん」は「彼の女」にしとく。

第四話

其の頃はまだ終戦後で食糧事情は極度に悪かつた。僕んちでも陸稲の一本植えをやつて増産に励んだ。一段歩許り仲々大仕事だった。其の時「勘ンちゃん」がスウーと何処からともなく飛んで来て僕の手先に着陸する。チョンチョン大地をつつく。お手伝いに来たんだなと嬉しくなる。そして単調な根気仕事の幾分かを慰勞してくれるのだつた。そして蛙がまだ冬眠してるのもある。ホッと投げてやると二、三回ブルブルと振つてバタッと地面にたたきつけバクバクツとのみこみ首をか上げて僕を見る。首をか上げて一寸考え顔のポーズはからすの特徴の一つだ。

第五話

夏には乾し草など焼くことがよくある。

成長してから僕の気掛かりなのは其の性別だつた。雌かな雄かな？ 新田宿の某家に行つた時、ひょうきんなお婆アちゃんが居て集合の席で「うちじヤア皆んな女の子バツカリで、こねえだア親類の同年ベエの男の子が来て彼の女達と一緒に湯いへエつて、そウしたら「〇〇ちゃんにヤとび出してゐるもんがあるよー」と乞驚して叫んだ。「お前エにヤあ無エのかよ。そんなじゃあお前エ達ちア忘れて来ちゃつたんだナ」と答えて大笑いしちゃつたと」。

僕んちの「勘ンちゃん」もこの点はさつぱりわかんない。「勘ンちゃん」の飼育主任は僕である。だから判然して置く責任がある。誰もが経験したであろう様に僕も、左手で後から「勘ン」の首根つ子を掴み、右手で背中からおさえ、そしてフウフウ其のあたりを吹き分けて検査する。穴は勿論ある。ピクピク呼吸のたんびに収縮はするが男か女かだけは全然不明。只要所をつかまえられてゐるからこんなことをされても至つて神妙。目をパチクリそれをひっくり返して居ると火中に飛び込んでバタバタバタと羽ぶるいし、火の粉を全身にあびる。制しても止めるものでない。夢中だ。羽虫退治なのである。

第六話

からすは早起きだ。僕は冬でも、朝五時に起床し山門を開け放光殿を開け放して勤行(ごんぎょう)に入る。いつの間にか「勘ンちゃん」が来て畳の上でチョコンと読経を聞いて居る。

グチュグチュ、ムニヤムニヤ……これは読経の真似だ。「父ちゃん」「母ちゃん」「オハヨウ」「アハハ……」などは得意中の得意語で発音も明瞭で美しい日本語の体得者でもある。特に「父ちゃん」「母ちゃん」は淋しい時に鳴くらしい。僕も時には「寝忘れ」もある。禅語で「朝寝坊」のことだ。こんな時兩戸をコッコツたたいて起こしてくれるのも「勘ンちゃん」だつた。

第七話

「万葉原歌」

朝鳥アサガラス早ハヤ鳴ナリ吾背子ウセゴ之ノ旦開アサケ之容儀ノスガタ
見ミ者シ悲母カシメ
「通読」

朝鳥早くな鳴きそ吾が背子の

朝けの姿見れば悲しも

「大意」

朝がらすよ、早くは鳴いてくれるな、早く鳴かれると、私の夫が、明け方早く、私から離れて、帰って仕舞うから、其の姿を見るのが悲しいヨ。だから朝の早鳴きはしてくれな。

第八話

来客があると「勘んちゃん」の出番となる。お茶やお菓子が出る。煙草にマツチはつきものだ。すると其のマツチをバツとくわえ、コッソコッソこづいてから横に振ると軸木がバラバラと散乱する。お客さんがあつけにとられていると素早くそのお茶腕をひっくり返す。マアアと慌てて仕末をして居るうちにお菓子を取って別室でゆっくり一服する。そして次の悪戯(いたづら)は何かしらと例の首

をか上げて考える。糞もおかまいなし。あつちにポツン、こつちにポタリ、家妻は掃除係員と云う配役。色あせたダンブクロのモンペをはいて無言で仕末をして居る家妻をよく見かけたもんだ。

第九話

世に「からすの行水」なる語がある。自由だから池の水源の浅い所に行つて思う存分の行水をやる。大抵朝である。パチャパチャ、ピチピチ四方八方に水をはね飛ばす、それはそれは雄大な行水だ。

しばしお化粧に耽ると山門の棟にとまり、大声一番「カアカア」と高らかに鳴く。

この行水は時間的に余り長くない。だから風呂の早上りの人を「からすの行水」と評する。

第十話

こんな目に入れても痛くない初代「勘んちゃん」だつたが五年位して冬のある朝ポックリ自分の小屋で死んで居た。病気の徴候は一寸も無かつたが安楽死なのである。大悲心陀

今度は彼女の住居を裏庭の軒場に二メートル立方位のものを建ててやつた。毎日の愛撫は前回同様、そしてカアカア鳴くのは泣きんべで彼女の本性であり、新居に満足気だつた。

第二話

初代「勘んちゃん」の急逝に依りポカンとした空虚の毎日毎日が続いた。顔見知りのお客様は「勘んちゃん」は？と「びんぎ」を必ず聞いて下さるのだった。

これも五月の或る日、皆原の猪木原さんが二羽の雛を持つて来てくれた。僕が「いたら是非に」と頼んで置いたものである。一陽来福初代勘んちゃん同様に主として密漁鮎の御馳走で養育した。これも突によく狎れた「勘んちゃん」に成長した。

所が二羽を飼う事はなみ大抵ではない。一人立ちになつたら彼等の自由意志にまかせて飛び立たせてやる心算だつた。だがそれも可愛想だし……色々迷つたあげく丁度飼育経験のある芹沢の大矢菊次郎さんを知り太鼓判で嫁入りさせることが出来、一羽が我が家に残つたのである。

所で僕んちには裏山に五、六羽の先輩が住みついている。今でもそうだ。毎朝毎日「来い来い」と彼女を誘いに来るのである。僕は同輩として愛情に満ちた善意に違いないと確信していた。おしまいには裏山の崖の上にある山桜の大木が新居の上のしかかつて居る考えたものだ、先輩ガラス三羽はこの桜の枝の短かいのをポキリポキリと折つてカアカアと叫び彼女の住居の前にバサッと落とすのである。剃刀の切れ味を持つくちばしだ。折ることなど平ちゃらだ。これが毎日ひつきりなした。つまり鳴くだけでは意足らず、来遊を誘つての好意の伝達方法だつたのである。余りのことに一と朝彼女を出してやつた。よるこび勇んで前庭の辛夷(こぶし)の大木の下に飛んで行つた。所がすぐさま大乱闘が始つ

た。先聲三羽がグルになつて寄つてたかつて彼女を突つつき翹つてゐる。リンチだ。彼女は孤軍奮闘將に死にも狂いの抵抗だった。僕はこの事実を目撃し、はだして飛び出して彼女の危急をすくつた。そして知つた。一度人間の息のかかつた「カラス」は絶対に彼等の仲間に入れられない事を。そして物凄いリンチを受けねばならないことを。

そんなことをして置き乍ら毎朝毎日の桜の枝の信号は絶えない。拾い集めたら大たば一把位の量だった。オーバーかも知れないが、これには又びつくりしちやつたのだった。

第三話

すべてのからすはお行儀悪く食い荒らす習性がある。毎朝の餌の食い残りや御飯や魚のあらが下に落ちる。これの整理に定時来訪してくれたのが隣りの遠藤儀平さんの奥さんのお豊さんの愛猫である。三毛だったかな。それにもう一匹は「黒」がいた。これは野良だった。

「黒」はやがて妊娠して大きな腹をノソリ

とどつた。先づ頭を撫でてやる。非常に喜ぶ。次にくちばしを上げて僕の鼻と擦り合わせることである。気分満点といった具合に目をしろくろさせて僕のするままに任せているのだった。

第五話

長い年月が経過した。金網の諸所がほころびた。剃刀の鋭さで彼女が突つきねじり破るのである。とうとう自由自在に出入出来る穴に発達した。でも自由にさせて置いた。これが僕と彼女との悲しくも亦嬉しい物語に発展するのである。

山門の横に段丘を降りて来る九尺道があつてコンクリ塀をめぐらした長い参道と合流する。これが学童の登校路に指定されている。「勘んちゃん」はこの集団登校の学童群の頭上を滑走することの快を知つた。神武天皇大和入りの時道案内をした八咫鳥（やたのからす）よろしく大きい翼を存分に拡げて山門をくぐり抜け頭上ひくくスーッとかすめ飛ぶ。学童の驚きつたらない。首をすくめてワアワ

ノソリゆつくりやつて来る。僕は「勘んちゃん」に多分に給餌して散乱量を増やしてやつて「黒」の無事出産を祈つて居た。いつの間にか「黒」のお腹が常態に復した。何処かで安産したのだろう。

所がだ。この「黒」が或る朝三匹の仔猫を引き連れて「勘んちゃん」の下にやつて来た。二た朝三朝続いたが以来ブツリと三匹の子猫は来なくなつた。親猫「黒」は来るのだが。僕は「黒」が「こんなに大きくなりました」とお礼の心算で三匹の子猫を見せに来てくれたのだと悟つて涙したのだった。これは「勘んちゃん」に附随した愛情余談である。

第四話

それから今度は前庭のモクセイの大樹の下に二メートル立方豊かな金網張りの大型小屋を建ててここに移つてもらつた。世人に紹介する目的でもあつた。目の高さの止り木は彼女の常駐場となつてお気に召した。

僕の彼女へのサーブビス日課は食餌と洗顔水の入れ換え作業と最後に彼女とキッスすること

アガヤガヤ……。これには僕も驚き恐れ入谷の鬼子母神。それでも飼主の僕は「勘んちゃん」のたわむれで学童への愛情表現だな位に我田引水の善意に判断していたのである。それがとうとう毎朝塀に止まつて待ち伏せる態勢をとり、学童等の恐怖が大きければ大きい程彼女の滑走にも熱が入つた。遂に女の子の頭にとまつた。中年婦人の髪にとまつてカアカア。あの飯島忠雄さんの額頭にとまつたのもこの頃だった。

ジャンジャン電話が来る。今朝もあしたも何とかしてくれとの苦情。中にほおしかけて来る父兄も出はじめた。

悪い時には悪いものでこの頃の新聞は新聞で全国的に「からすのギヤング白鳥の卵を襲う」とか「狂暴の子連れがらす」とか「急降下学童十人を襲う」とか「からす老女の油揚げを奪う」とか彼女の為にならない記事ばかり連日報道する。

僕は嚴重に金網を整備して彼女の自由外出を禁止したのは当然すぎる当然だった。時は流れる。いつか又金網を破り自由外出

する。全く知らない間の出来事だ。でも夕刻には必ず帰宅する。チョコンと止まっている。それが遂に外泊にまで発展した。でも二、三泊で必ず帰宅したのだった。

第六話

遂に外泊から半年も帰らない日が来ちゃった。僕の家庭では傷心の日々だった。或る日僕は海老名上今泉と座間との境界あたりを自転車飛ばしていた。そこには蓋のある溜池があった。そこでチョコンと淋しげに立っている。「勘ン」じゃないか。「勘ンよ」と呼んだらすぐさま例の僕の左手に止まってカアカアとそれはそれは澄んだ声でブ放したのだ。真正銘僕の「勘ンちゃん」である。性別が不明であること程左様にどこの家からすかはおかゝる特技が無い限り判別はむずかしい。又つかまりもしない。僕の喜び彼女の喜び。早速連れ帰り家妻にも面会させ事情を語りつたら家妻の瞳に白いものが光って居た。その晩は祝杯を挙げお互の無事再会を心から祝したのは申す迄もない。

第七話

それから又半年は経った。そして又行方不明。丁度僕んちの子が悪戯者で「私は〇〇〇の悪いことをしました」の看板を首にぶらさげられて運動具を三回まわらせられて居る晩秋の頃だった。

或る日、それこそ或る日である。鈴長公民館の前を通った時、側構役をしてる糞っ川を渉獵しているカラスが居た。見覚えのある「ハンプトガラス」だ。「お勘ンヨ」と呼んだらすぐさまピョコンと左手に止まってカアカア……。これまた正しく僕んちの「勘ンちゃん」だった。

足掛け五年三度目の涙の対面だった。目に見えぬ何物かが確かにある。嬉しかった本当に。世に云う「因縁」ですね。

第九話

かかる因縁深い「勘ンちゃん」も或る日ポツリ逝っちゃった。老衰ではないが安楽死だった。初代二代と並べて葬ってやった。さきに大矢菊次郎家に嫁入りした姉妹ガラスの「勘ンちゃん」は余り押れ過ぎて居たのでお客さんに盗まれちゃったとの事。当時大

明になった。一家傷心不安な日々が続いた。或る日河原宿の野口武男さん宅に所用あつて出向いた。と玄関横の小ぢやかな檻にカラスが居る。「勘ン」と呼んだら全身をブルブルとゆすぶりカアカアと高らかに鳴いた。余りの不思議に妻君に尋ねたら「何処のか、わからないが道で遊んでいたから保護してます」との事。一部始終を話して連れ帰った。それにつけても彼女に対する愛情の交流はいや増しに増して行くのだった。

第八話

まことに読者に申し訳ないがそれから又半年ばかり経って所在不明になっちゃった。が、さきに二度も生還したんだから今度も又いつかは帰って来るだろうの不安の中の安心感もたしかにあつて時は流れて行つた。噂によると座間小学校の教室の窓に止まってカアカアと学習を見ているとか。むらがる生徒のお相手をしているカラスが居るとか。すぐさま尋ねたのだが其の先生は知らないとの返事。とりつく術もない。

矢さんは「お狩場焼」を創業し其の盛業中の出来事だった。

三代目「勘ンちゃん」

第一話

何事も無かつた様にいつしか時が流れて又新緑の五月がやって来た。そんな時河内住宅の中村さんが烏の赤ん坊雛が飼ひ切れなからと云って持つて来てくれた。小舎は先輩ガラスの住居に充て、但し金網を張り替えて安全性を高めた。蝶よ花よと育てたことは前述の通り。一陽来福笑声が高らかに響いた。

でも矢つ張り逃げると云うか否外出と云つた方が適切かも知れない。木のテッペンでカアカアと鳴く。

夕焼頃になると帰舎する。おなかもすいてる。長い廊下の一ヶ所だけ入口を明けて置いて他は全て締め切り、中に好物を入れて置く。チョコチョコ這入つた時点でビシヤリと締める。彼女は慌てて右往左往飛び廻る。養鯉用のデッキカイトも網で追い廻してつかまり一巻の終り。また小舎の住人となる。初代以来何

遍何十遍の繰り返し。だからこそ僕の所作も堂に入ったもの。

第二話

当時座間公報に毎月植物誌の連載中だった。べ切り日も過ぎて仕舞って督促を受けてる時、寝ずつこて書き上げた原稿を白い封筒に入れて早朝持参すべく玄関に置いた。所が無い。家中で捜したが無い。僕は全く慌てたな。ほんに瞬間の出来事だった。

「勘ン」の声が前隣りの方からする。さてはと飛び出して見たら、果して大きい屋根のテッペン破風(はぶ)の隙間に一生懸命白いものを突っ込んでる。所謂収蔵本能最中だ。其の家の長い梯子を借りて一人でやつとこさ掛け、ミッシミッシとトタン屋根をおっかなびつくり登って行くにはとつても気が引けた。この家に気の毒で。妻は落ちないでと梯子の根っ子をおさえつけていた。「勘ン」は地境いの僕んちの弁天様の程の太木のテッペンでカアカアと首を傾げて僕をジッと見つめていた。情ないやら、うらめしいやら、悲し

いやら、そしてまた嬉しいやら渾然一体の感情をいやと云う程味わった。

第三話

相模原から来て門前のコンクリート塀の修理をして居た中老のおじさんが
爺 奥さん、なんかひま(紐)アねえかね。
妻 何んにするんですか？

爺 からすウつかまえちゃったんでさア。仕事をしてたらスウーッと飛んで来て、わし
のあたまたえとまつたんでさア。しばつと
いてうち持ってくベエと思つて

妻 あア、それはうちの「勘ちゃん」ですよ
爺 呆然として、ハァー、どうりで。

第四話

からすは赤い色が好きだ。そしていたずら者であるが又一面茶目つ気も多分に持つて居る。

或る冬の日のひるさがり、何気なく窓外を堪能してる時のことだった。中年の田舎美人が参詣に來られた。冬の事だし厚着の盛装で裾さばきもあざやかに、パッパッと暗赤色の

裾裏が反転して何とも言えないなまめかしさ目ざとい「勘ン」が見のがすわけがない。

スウーと飛んで来てビヨンと降りてビヨンビヨン婦人に近寄つて其の赤い裾をひっぱつたのだつた。彼の女は驚いて「この助平がらす」とつぶやいて追いのけた。すればする程「勘ン」は裾を開こうとする。婦人はホトホト困惑の程、ほとんど歩るかせない。

僕はこの始終をじつと見て居たので、稍荒っぽく「勘ン」とたしなめたら山門の屋根に飛んで行つて「カアカア」

○あら、和尚さんですか、この「からす」わたしを歩かせないんですよ。

△どうもすみません、失礼しました。

僕はこの盛装婦人と突嗟に発した「助平がらす」の名言に苦笑しちやつた。

第五話

矢張り早朝の事だった。「勘ン」の小舎をグルグル廻つてゐる一羽の仲間が居る。弊衣破帽鳥相極めて悪しき大分荒れてる「カラス」だ。全然見覚えも無い。明日も明後日もやつ

て来て一日中カアカア鳴きめぐる。僕んちの

「勘ン」は時々金網越しに対する。いや、やかましいことつたら……よく見ると之は「ハシボンガラス」だった。何処かで飼われてたのが脱走し、「勘ン」の鳴き声に誘われてやつて來たのだろう。それ程御愁心なのだから、吃度異性で仲良しになれるかも知れないの半信半疑でやつとこさ小屋に入れてやつたはやつたが、すぐに仲良しにはならなかつた。でも追いかけてまわしてはいた。

三日目の朝突然乱闘をはじめた。羽根は四散し、僕んちの「勘ン」は押され気味で敗色が濃い。慌てた僕はすぐ様叩き出しちやつた。押し入り婿だが許されぬ欲求不満が遂に爆発したのだろう。とんでもない野郎だった。

第六話

坊主は忙がしい。今度は何々家何ン時と急いで帰宅した。と同時に異国で学んだ同窓の一人が五十年振りにポックリ来訪した。

と同時に一昨日から外泊中だった「勘ン」が帰宅して早く小舎入りしたいと待つて居る

『早く入れてやって』との妻の歎願も同時だった。

久濶を述べ握手ししばし……。事情を述べただけで急抛行かねばならない我が身……。客の接待は妻に一任し……。『勘ん』のことも気になるが……。今日はなんだか胸騒ぎがする……。だが時間は迫ってるし、早く帰ってゆつくり入れてやろうと心に誓ってそこそこに出掛けたのだった。

帰宅するや否や妻は眼をつり上げて「勘ん」がどこかへ行っちゃったと報告。

「いよいよ。あしたの朝はきつと来るよ」と慰めたものの僕自身の胸騒ぎは尋常でない。

前述の如くしばしば経験した事だったが若しやまたもと連日捜し廻った。居ない。

丁度五年前の今頃だった。待てど暮せど帰らない。

「勘ん」よ。すぐ入れてやれなかつたあの日の僕を許してくれ。

第七話

今年（昭和五十一年）五月十九日の朝僕は

佐渡両津港出帆五時三十分新潟港に入港したのが七時三十分乙姫丸の甲板上一人手すりにもたれて下船を待っていた。早朝なので客人は寥寥だった。

すると一羽の「カラス」がバサバサ僕の頭上すれすれに滑空し十メートル位離れた所の甲板の手すりにチョコンと止まって大きく羽ばたいて二声三声カアカアと鳴いた。そして首をかしげて一考よろしくしげしげと僕をみつめているのだった。

昭和五十一年 十月十五日 印刷

昭和五十一年 十月二十日 発行

編集者 座間市文化財保護委員会

発行者 座間市教育委員会

（座間市座間二八八〇）

TEL 〇四六二一五一〇三〇四

印刷者 トウイン印刷株式会社

座間市相武台二丁目四五〇四番

TEL 〇四六二五三〇四八（代）